

第25期考古学セミナー（2023年度）

—山形県の指定文化財と出土遺跡—

第1回講座

講義①

旧石器時代・縄文時代草創期の指定文化財
と関連遺跡

当館館長

渋谷 孝雄

令和5年9月24日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

山形県内の旧石器時代・縄文時代草創期の

指定文化財と関連遺跡

—新庄市の旧石器と山形県内の指定文化財候補について—

渋谷 孝雄

1 山形県内の旧石器・縄文時草創期の指定文化財について

山形県内で文化財に指定されている考古資料には重要文化財や県指定の文化財はない。市町村指定は5件あり、新庄市が3件、長井市と小国町にそれぞれ1件である。山形県内の旧石器時代資料は多く、今後、指定される資料も少なくはないと思われる。

今講座では指定文化財を紹介した後、最も多くの指定品がある新庄市の旧石器を紹介し、さらに、県内の出土資料で今後、文化財として指定されるべき資料を紹介したい。

2 山形県内の旧石器時代の指定文化財と遺跡概要

(1)新庄市指定の東山(横前)遺跡の旧石器

東山遺跡は、新庄盆地東縁の市営陸上競技場の北側で昭和 37・38(1962・63)年に行われた発掘調査によって、新庄盆地で初めて旧石器時代の遺跡として確認された遺跡である。発見当時は「東山遺跡」と呼ばれていたが、後に所在地の字名をとり、「横前遺跡」として登録された。出土した石器には、石刃技法で作られた縦に長い剥片である「石刃」を素材として作られたナイフ形石器、搔器や彫刻刀形石器などがある。この横前遺跡の発掘調査が契機となり、新庄盆地の東縁部や西縁部、南部でも続々と後期旧石器時代の遺跡が発見され、調査されるようになった。

「東山遺跡出土品」として新庄市の指定文化財となった石器は最初に見つかった 20 点で、ナイフ形石器 9 点、彫刻刀形石器 3 点、搔器 6 点、石核 1 点、両面加工ブランク 1 点である。横前遺跡の概要は以下のとおりである。

横前遺跡

新庄市大字金沢字横前に所在する。1962 年と翌 63 年に加藤稔を担当者として新庄市教育委員会が発掘調査を行った。

遺跡は戸前川の南側、奥羽山脈の西を限る丘陵の縁辺にある猿羽根Ⅱ面相当の洪積段丘面に立地する。遺跡の層序は

I：黒色腐植土 (20cm)

II：漸移層 (5 cm)

III：褐色粘土 (40 cm)

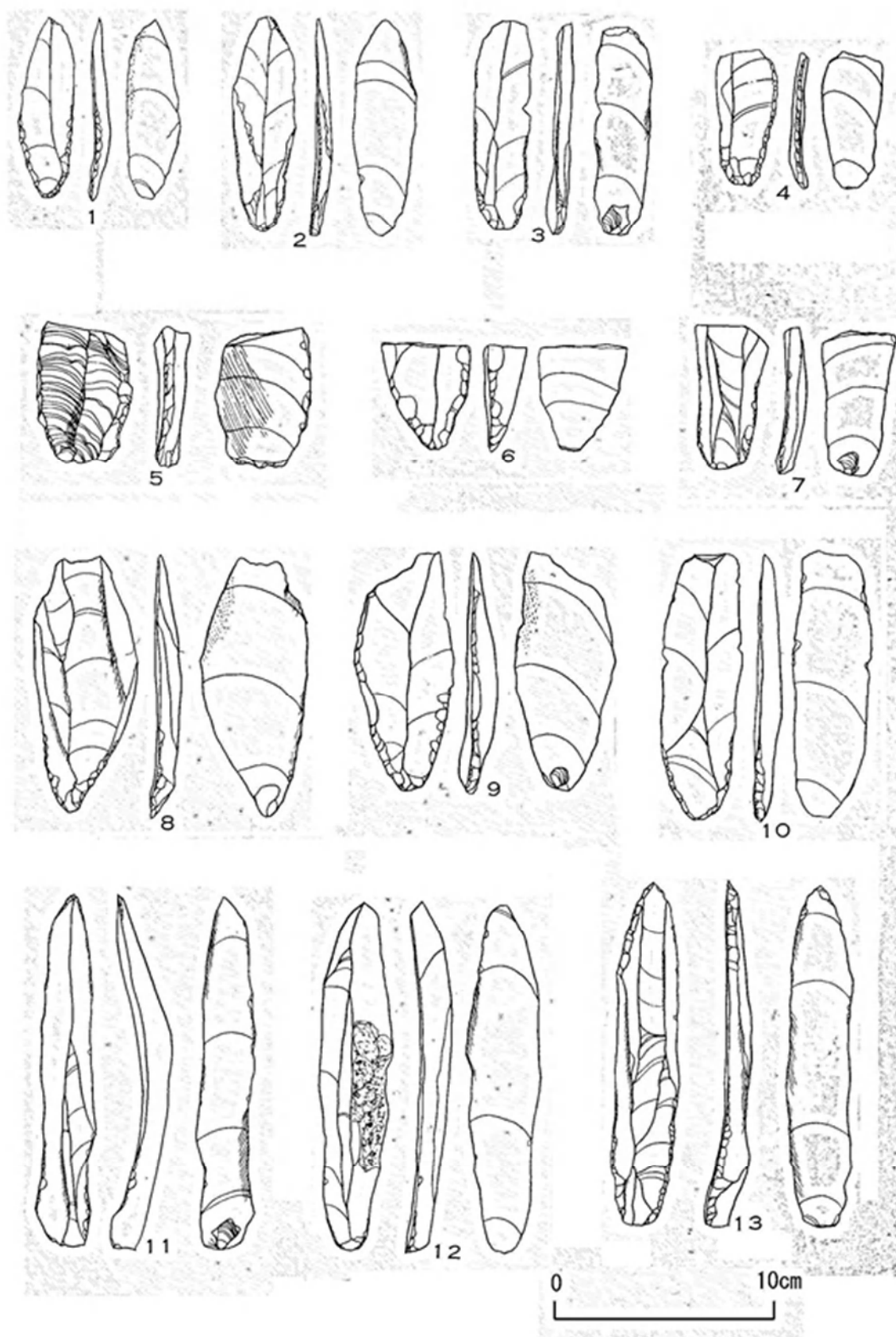
IV：赤褐色粘土 (新庄ローム約 40 cm)

IV：段丘礫層

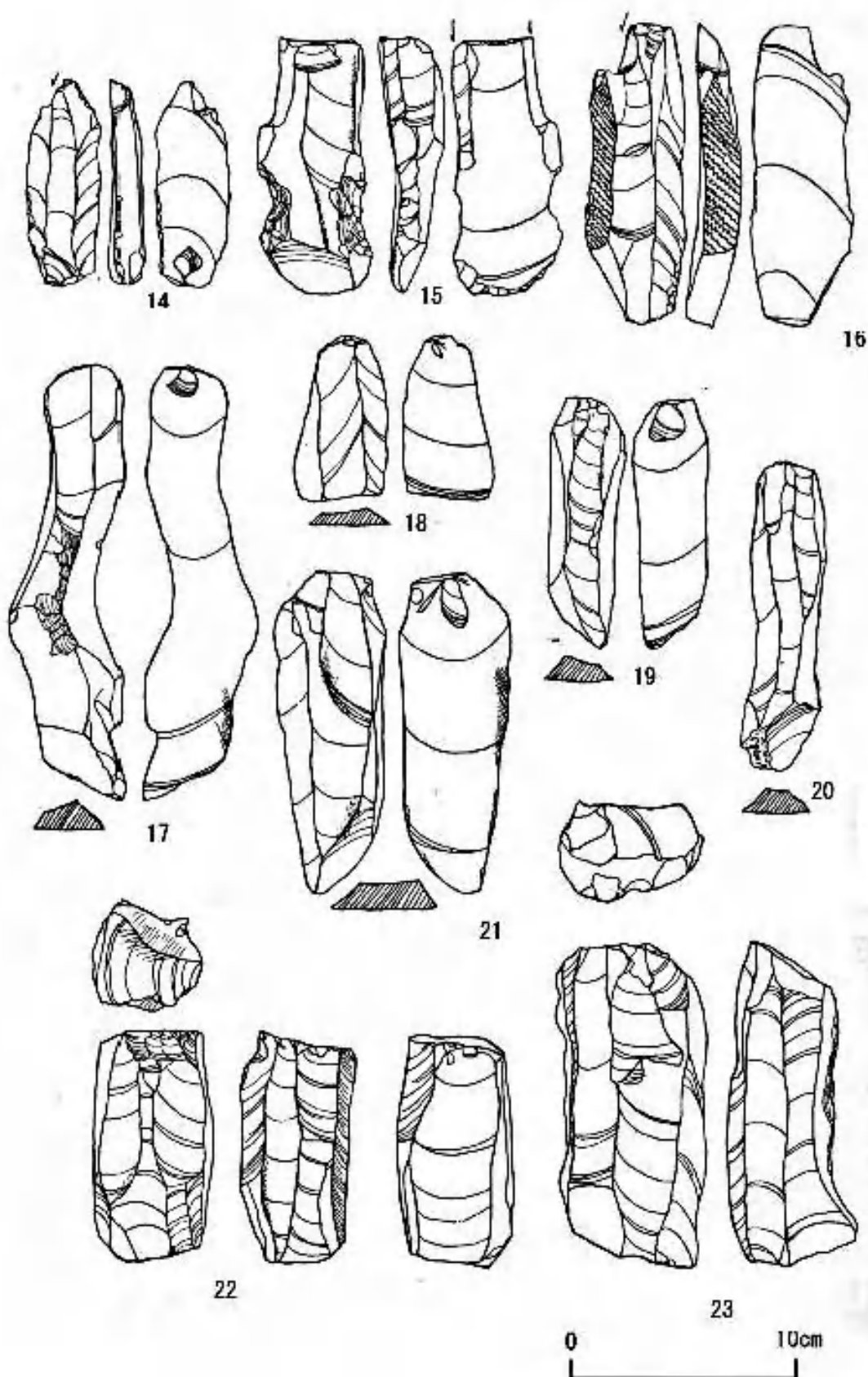
と続き、石器の出土層準は第3層の上部から 30 cmまでの範囲内である。

横前遺跡のナイフ形石器は素材の石刃の基部から中央部までの加工で基部側の打面も除去されて尖るものが目に付く (1・6・8・9)。先端部は幅広のままとなるもの (3・4・7~10) と尖るもの (1・2・11・13) の両者がある。彫刻刀形石器は少ないがその多くは小坂型彫刻刀形石器 (15・16) である。搔器は小形で幅広のもの (24~30、33)、大形で幅の狭いもの (31・32・34~36) があるが、小形のは刃部の再加工で短くなった可能性がある。搔器の石材は玉髓が多い。石刃核が7点出土しており、会田容弘によれば横前遺跡では一定程度の石刃製作が行われており、新庄盆地の遺跡の中では最も

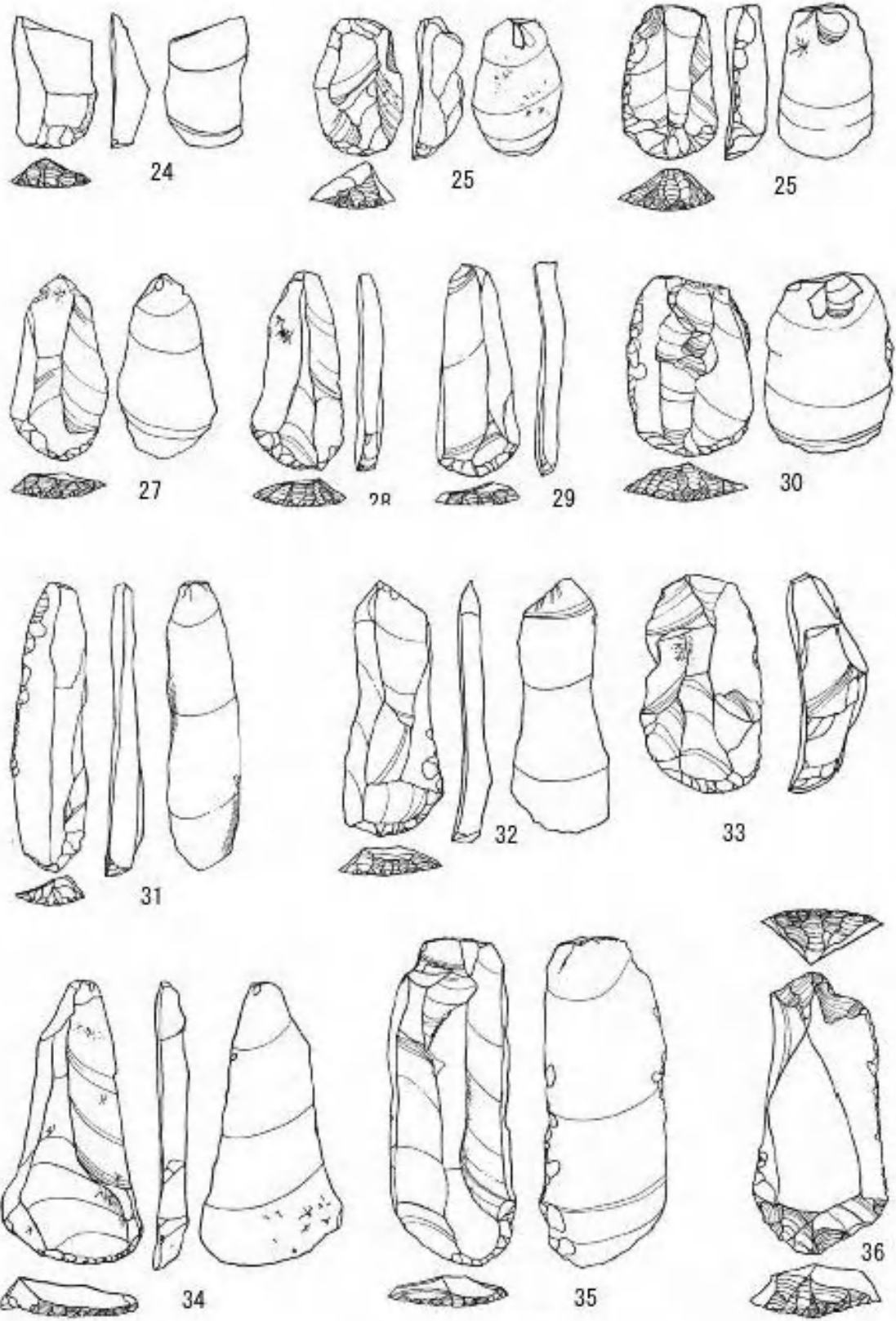
tool の割合が低い(会田 1993)。



横前遺跡出土石器(1)



横前遺跡出土石器(2)



横前遺跡出土石器(3)



(2)新庄市指定の乱馬堂遺跡の旧石器

乱馬堂遺跡は、横前遺跡から北に500m付近にあり、升形川の左岸に位置する。1962年に遺跡であることが判明し、1976年から発掘調査が始まった。

遺跡を現状のまま残すことを目的に2次・3次と調査が継続されたが、地元の要望では場整備事業が行われることが決定し1981年に大々的に発掘調査が行われた。旧石器時代としてはあまり類を見ない多量の石器が出土し、国内でも屈指の後期旧石器時代の遺跡として全国的に知られる遺跡となった。

後期旧石器時代の指定品は「乱馬堂遺跡出土品」として指定されており、4,287点と膨大で、その内訳はナイフ形石器が246点、搔器が348点、削器98点、彫刻刀34点、裏面搔器13点、石刃1,240点他となっている。石材は、頁岩を中心に玉髓・黒曜石がある。

乱馬堂遺跡の概要は以下のとおりである。

乱馬堂遺跡

新庄市大字金沢字乱場堂に所在する。1962年に窯業会社が採取した粘土の中に石器があることから遺跡であることが判明したが、すでに遺跡は壊滅したと考えられていた(加藤1964)。しかし、1971年、長沢正機が担当した新庄市教育委員会の発掘調査で遺跡が残存していることが判明し、73、74年にも調査が行われ、合わせて274㎡の調査で600点の石器が出土した。この地に団体営ほ場整備が行われることになり、1980年に県教委で事業対象地を試掘したところ、広範囲から旧石器が出土することが判明し、翌1981年に新庄市教育委員会が主体となって緊急発掘調査が行われた(長沢他1982)。

遺跡は升形川の支流の戸前川沿いの海拔120mの複合扇状地に立地する。遺跡の層序は

I：黒色腐植土(20～30cm)

II：漸移層(10cm)

III：黄褐色粘土

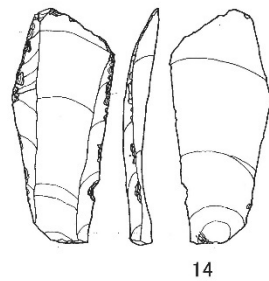
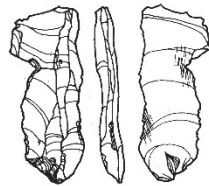
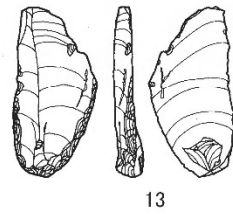
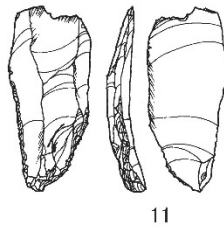
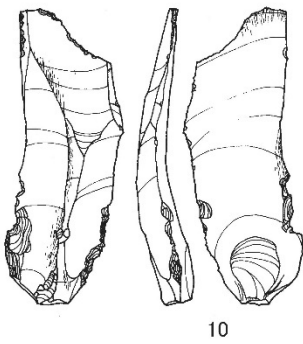
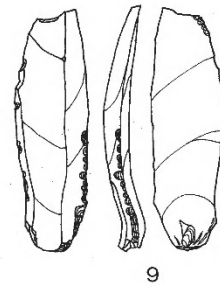
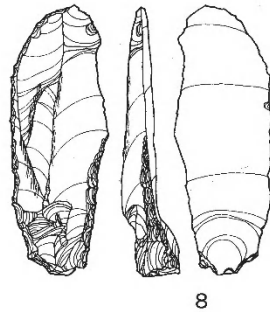
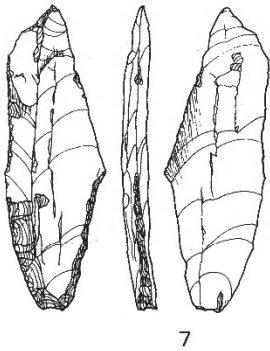
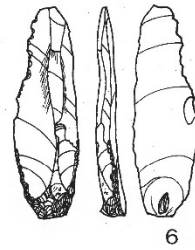
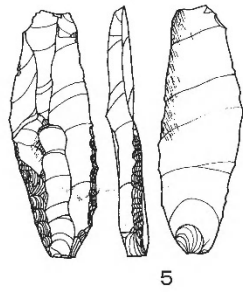
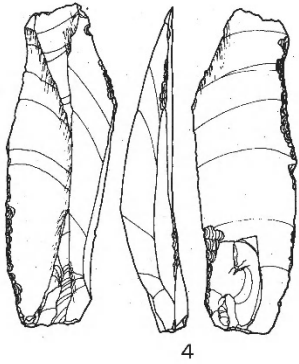
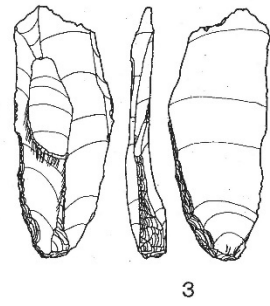
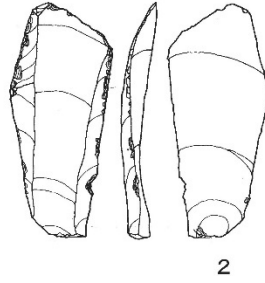
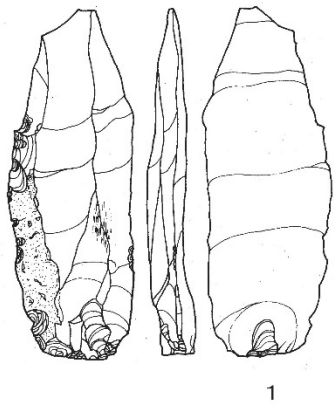
と続き石器の出土層準はII層からIII層上部に中心があり、III層にややくい込んだ形での出土が最も多い。

調査面積は6,850㎡とこれまでに県内で調査された旧石器時代の遺跡の中では最も広い。

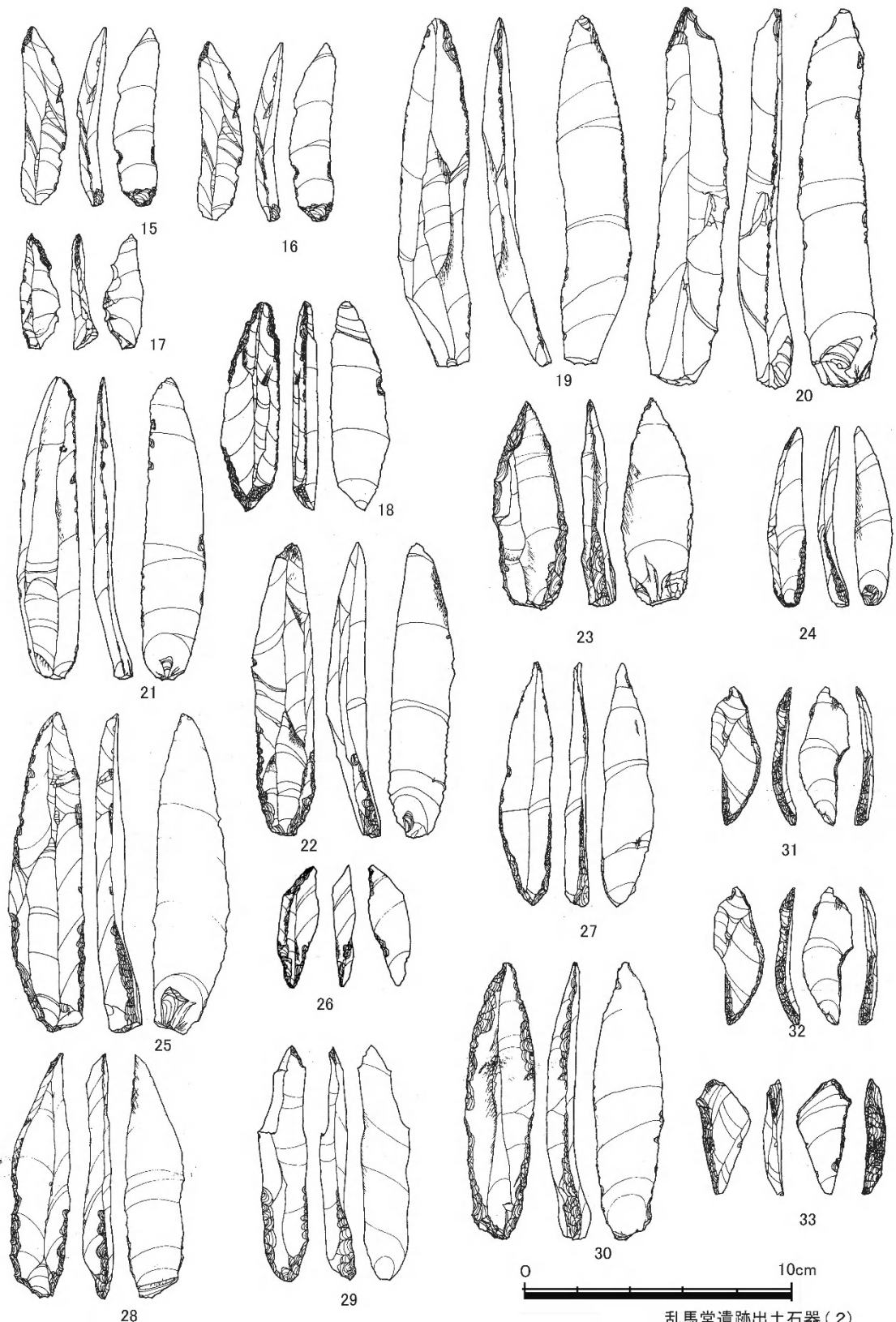
4次調査では旧石器が4,043点出土した。その内訳はナイフ形石器が246点、縦形搔器が348点、裏面搔器が14点、削器が98点、彫刻刀形石器34点、石刃1,240点、石核20点、剥片1,471点、碎片547点などとなっている。tool、石刃の数量は極めて多く、石刃の生産も行っていたことが接合資料や石核、稜付き石刃の存在から明らかであるが、石核調整等初期工程の資料はなく、整形された石核が搬入されたものと考えられる。

ナイフ形石器の多くは石刃の基部両側縁に加工が施され、先端部を尖らす意図が見えないもの(1～5)であるが先端部にも加工を加えて、鋭利な先端部を作出するもの(6～8)や二側縁加工のもの(9～11)もある。ただし、二側縁加工のナイフ形石器は館の堀跡からの出土であり、基部加工ナイフ形石器と相伴するものかどうか、慎重に検討する必要がある。縦形搔器はtoolの中では出土数が最も多い。頁岩の他玉髓も好んで選択されている(14他)。南野遺跡と同様、大小の変異も大きい。主として石刃の先端腹面に入念な加工を施した裏面搔器(19)が14点出土している。彫刻刀形石器は石刃の先端部に数回の打撃を加え、そこを打面として彫刻刀面を作出した(16)もあるが小坂型彫刻刀形石器が多い(17)。裏面搔器の転用もある(18)。

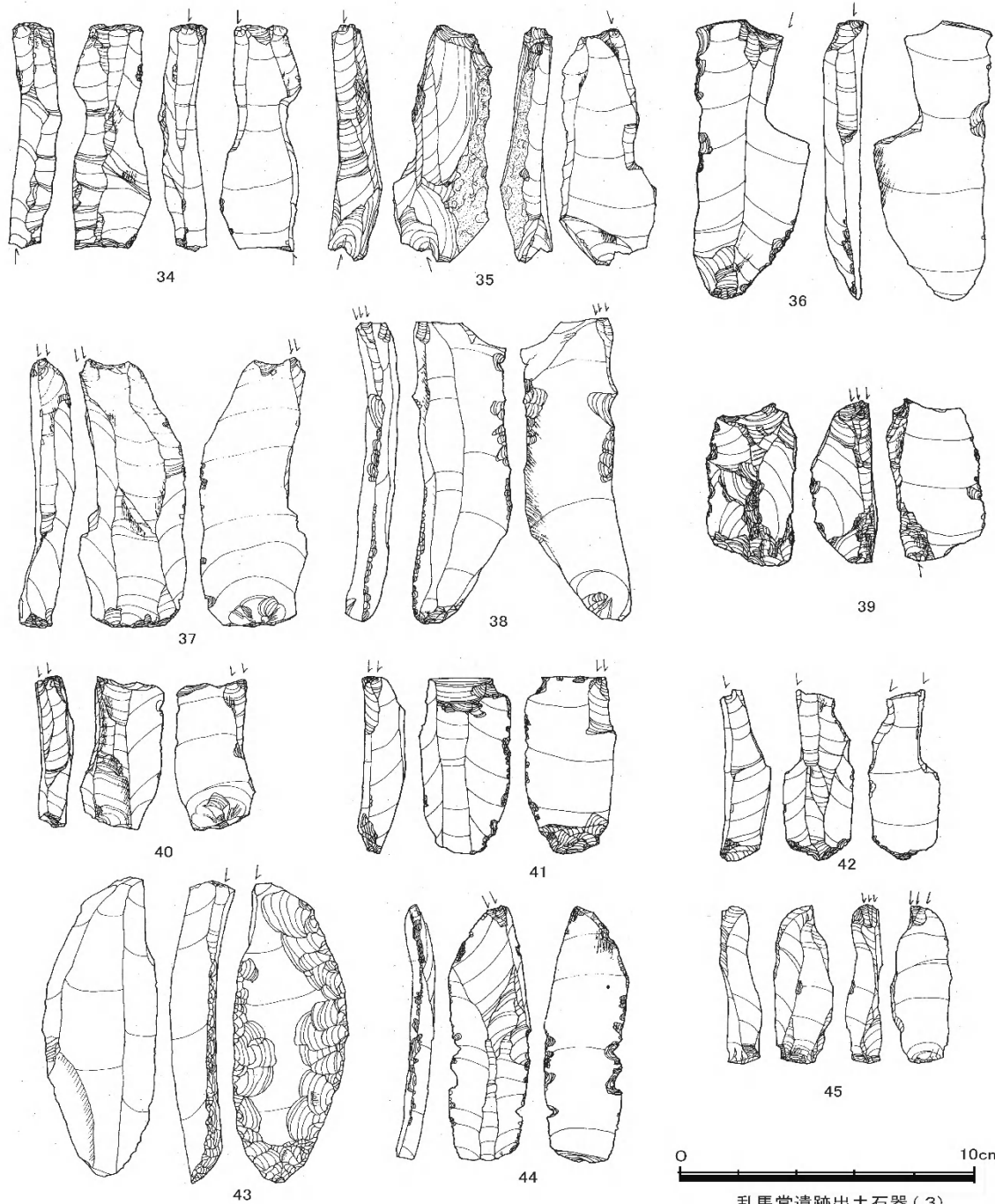
乱馬堂遺跡は当該期の遺跡としては極めて大規模な消費地遺跡で、遺跡内に石核のブランクが搬入されて、素材の生産と、石器の加工、使用、刃部再生が行われていた。(長沢他

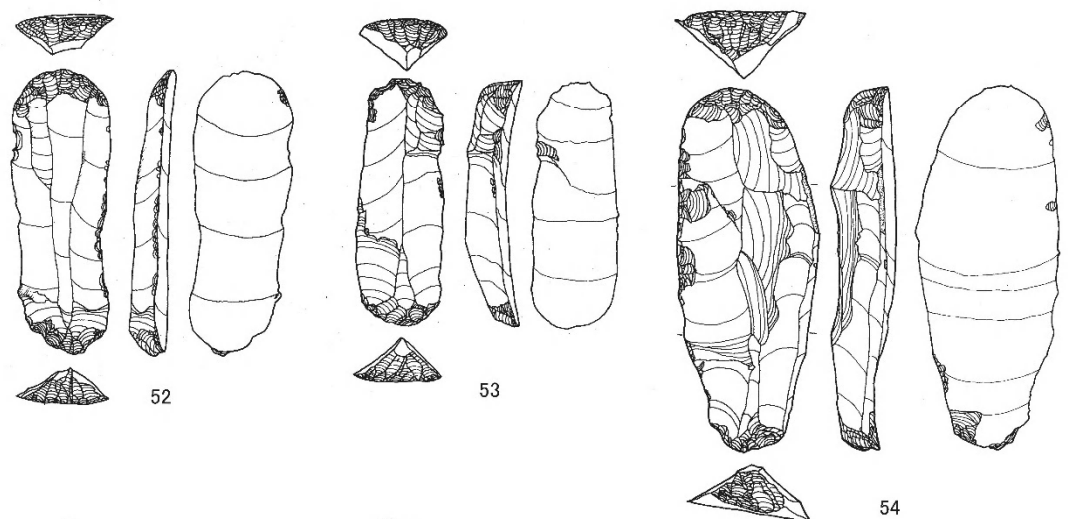
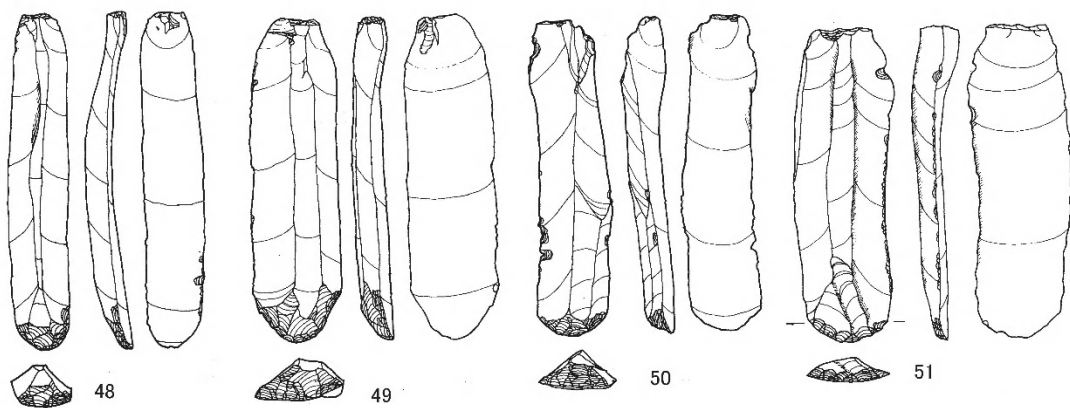
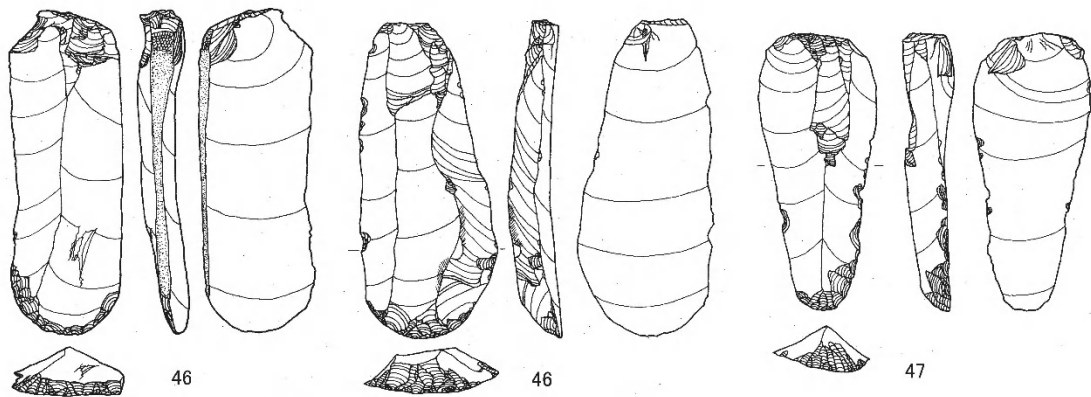


乱馬堂遺跡出土石器

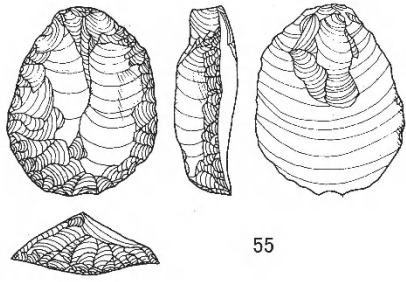


乱馬堂遺跡出土石器(2)

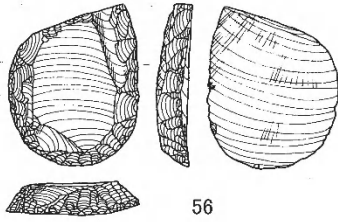




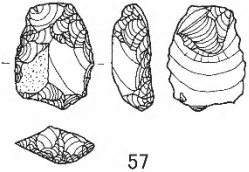
乱馬堂遺跡出土石器(4)



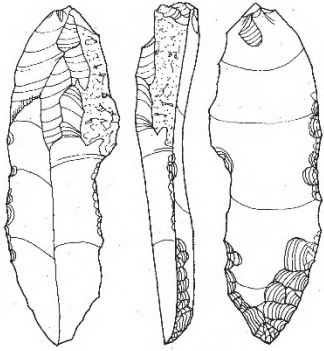
55



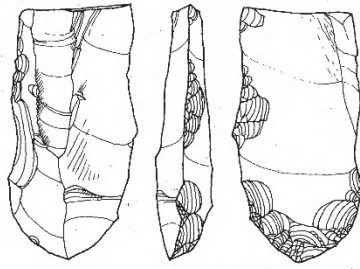
56



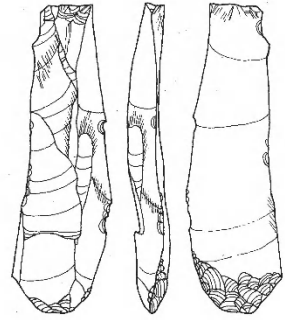
57



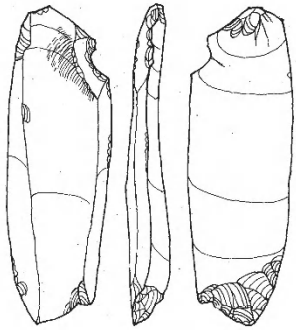
58



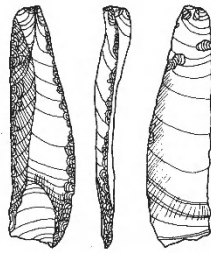
59



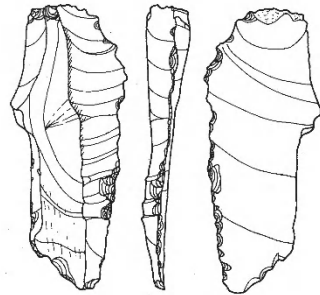
60



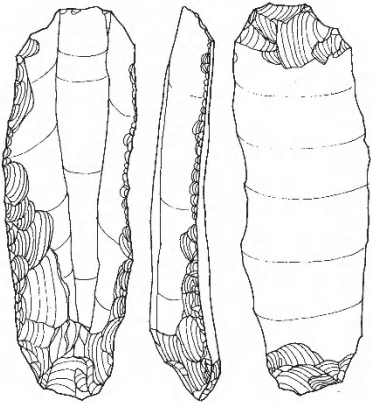
61



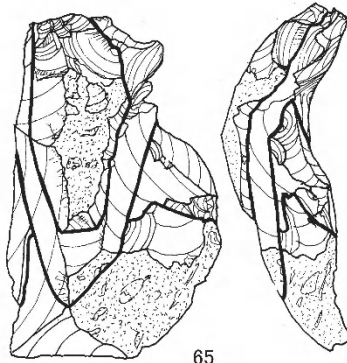
63



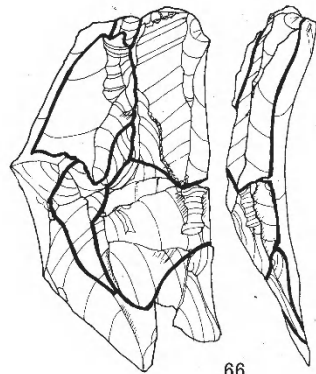
64



62



65



66



乱馬堂遺跡出土石器(5)

(3) 新庄市指定の南野遺跡の旧石器

「南野遺跡出土品」として新庄市によって指定された旧石器は256点である。

南野遺跡の概要は以下のとおりである。

南野遺跡

新庄市大字角沢字南野1571他に所在する。1974と1975年に長沢正機を担当者として新庄市教育委員会によって発掘調査が行われた。遺跡は新庄市の南西部の海拔105mの丘陵に立地する。

遺跡の層序は

I：黒色腐植土(20cm)

II：暗褐色粘土(35cm)

III：赤褐色粘土(40cm)

IV：灰白色粘土(40cm以上)

と続きII層下部の約10cmはIII層への漸移層となっている。石器の出土層準はII層を中心にI層、III層にも拡散している。

調査面積は157.5㎡で30数点の礫が散漫に分布する配石遺構と1.67×0.75mの長円形プランで深さ44cmの土壌が検出されている。

石器は489点が出土し、内訳はナイフ形石器57点、縦形搔器39点、彫刻刀形石器7点、石刃127点、剥片127点、碎片127点、その他9点となっている。

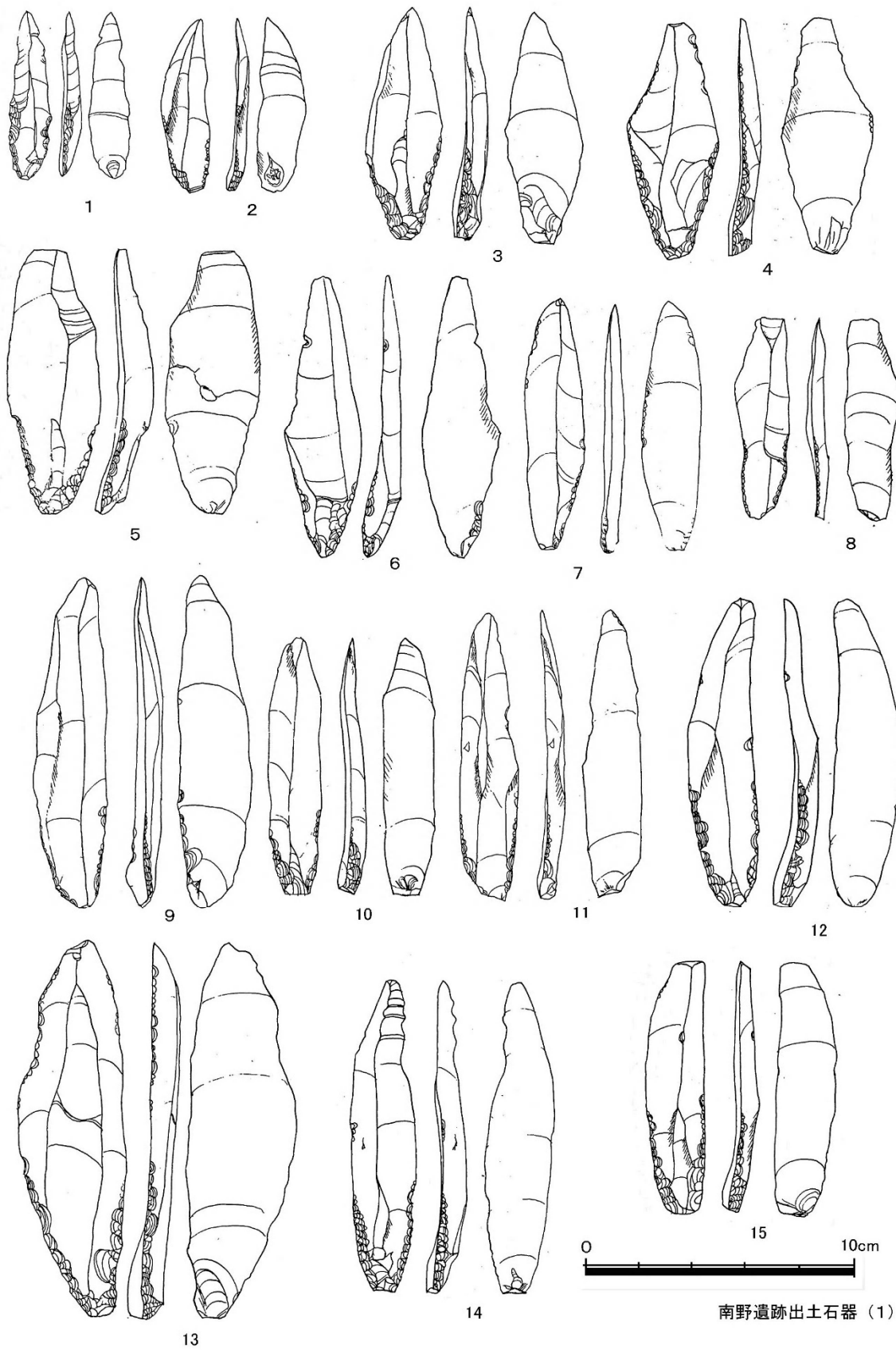
toolと石刃で約半数を占め、遺跡内で素材としての石刃生産を行った形跡はない。石材は主となる頁岩が79.1%を占め、次いで縦形搔器との結びつきが強い玉髓があり、黒曜石と、鉄石英が各1点である。

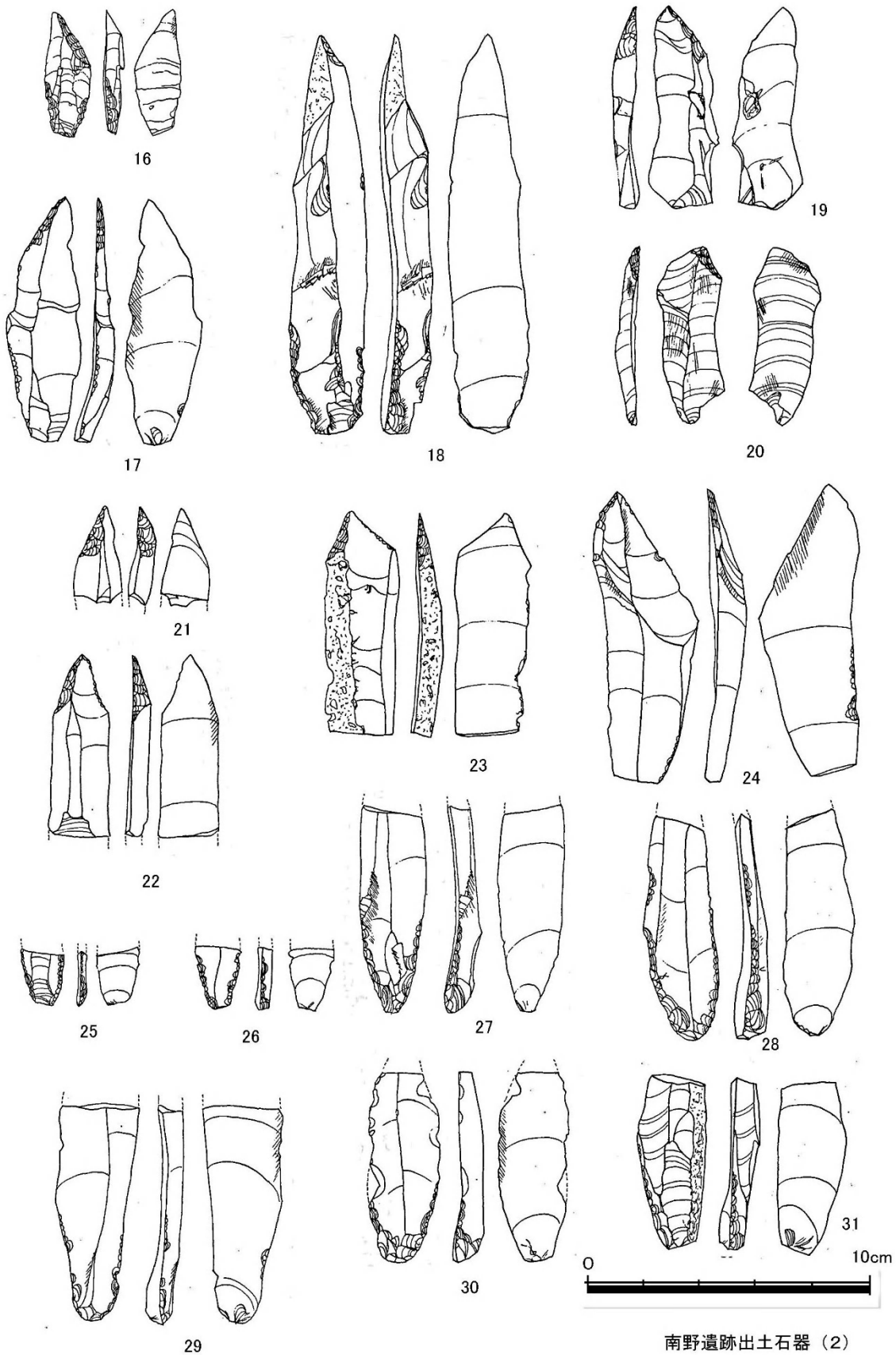
ナイフ形石器は基部両側縁に加工が施されるもの(1～15)と先端部にも加工のあるもの(16～24)があるが、意図的に先端を尖らせたものは少ない。25～31は両側縁に加工がある基部資料である。

彫刻刀形石器は7点すべてが截断した石刃に截断面から彫刻刀面を作出した小坂型彫刻刀形石器(32～38)である。

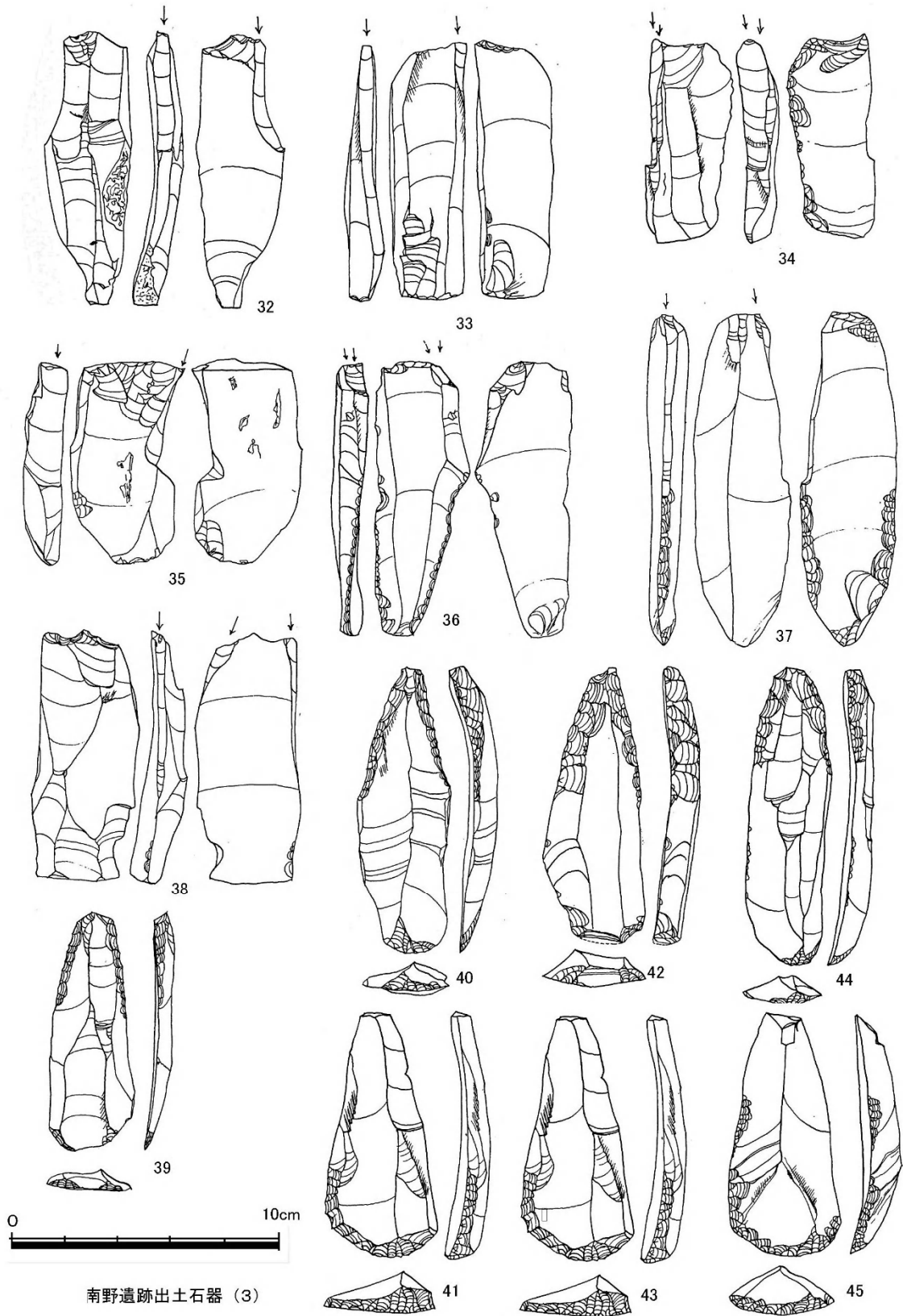
縦形搔器(40～68)は全長17cmのものから5cmほどのものまで大小様々のものがあり、刃部の再加工が盛んに行われたことを示している。ナイフ形石器の転用と見られる素材基部の両側縁にブランチングが認められるもの(39～40)や石刃の末端部にわずかな加工が施されたもの(67)もある。厚手の石刃の両側縁と腹面を加工した裏面搔器(長沢1982)も存在する(71・72)。

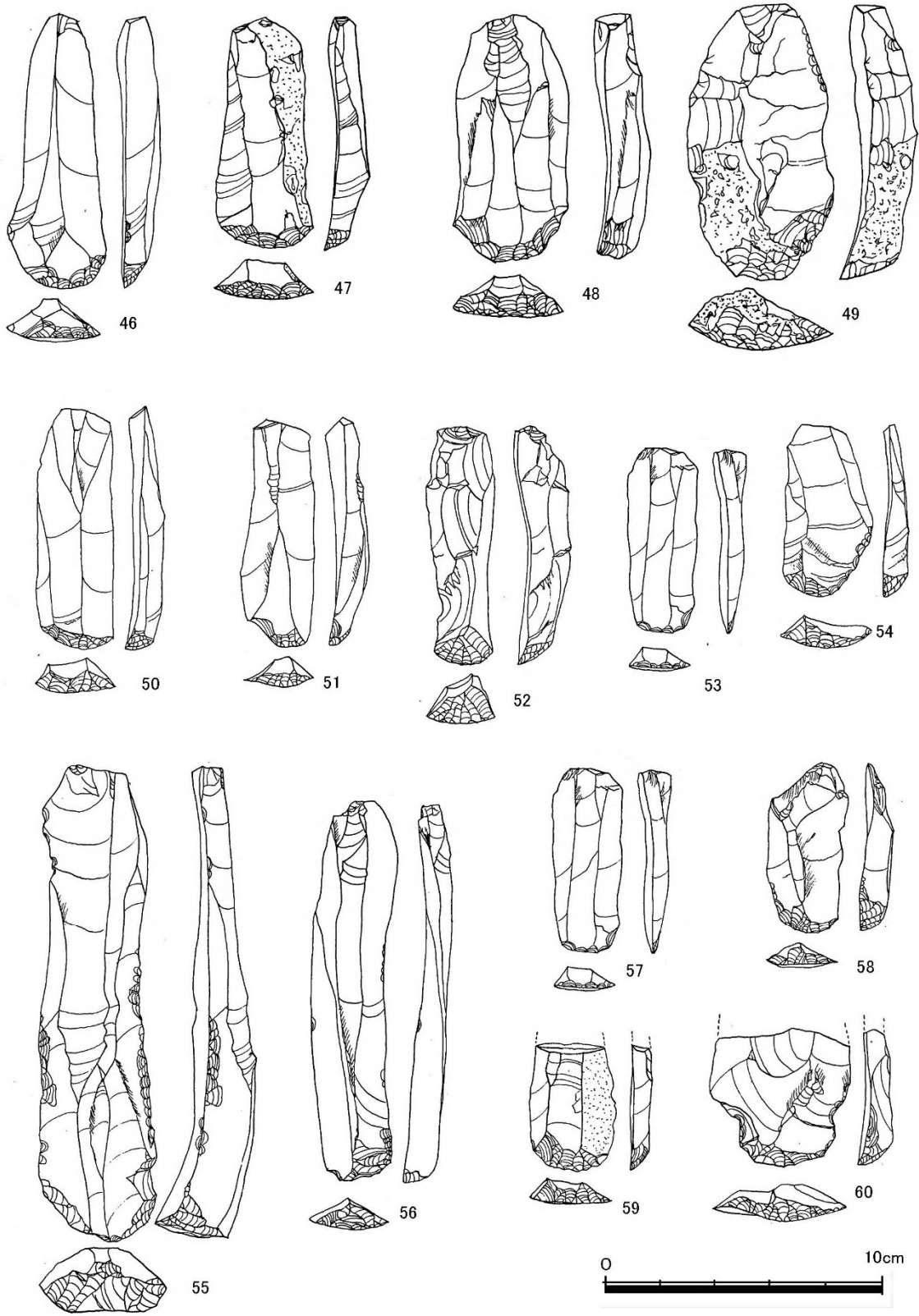
南野遺跡ではtoolと素材の石刃を遺跡内に搬入し、使用と刃付け、そして刃部の再生を行っていた消費地遺跡である(長沢1997)。



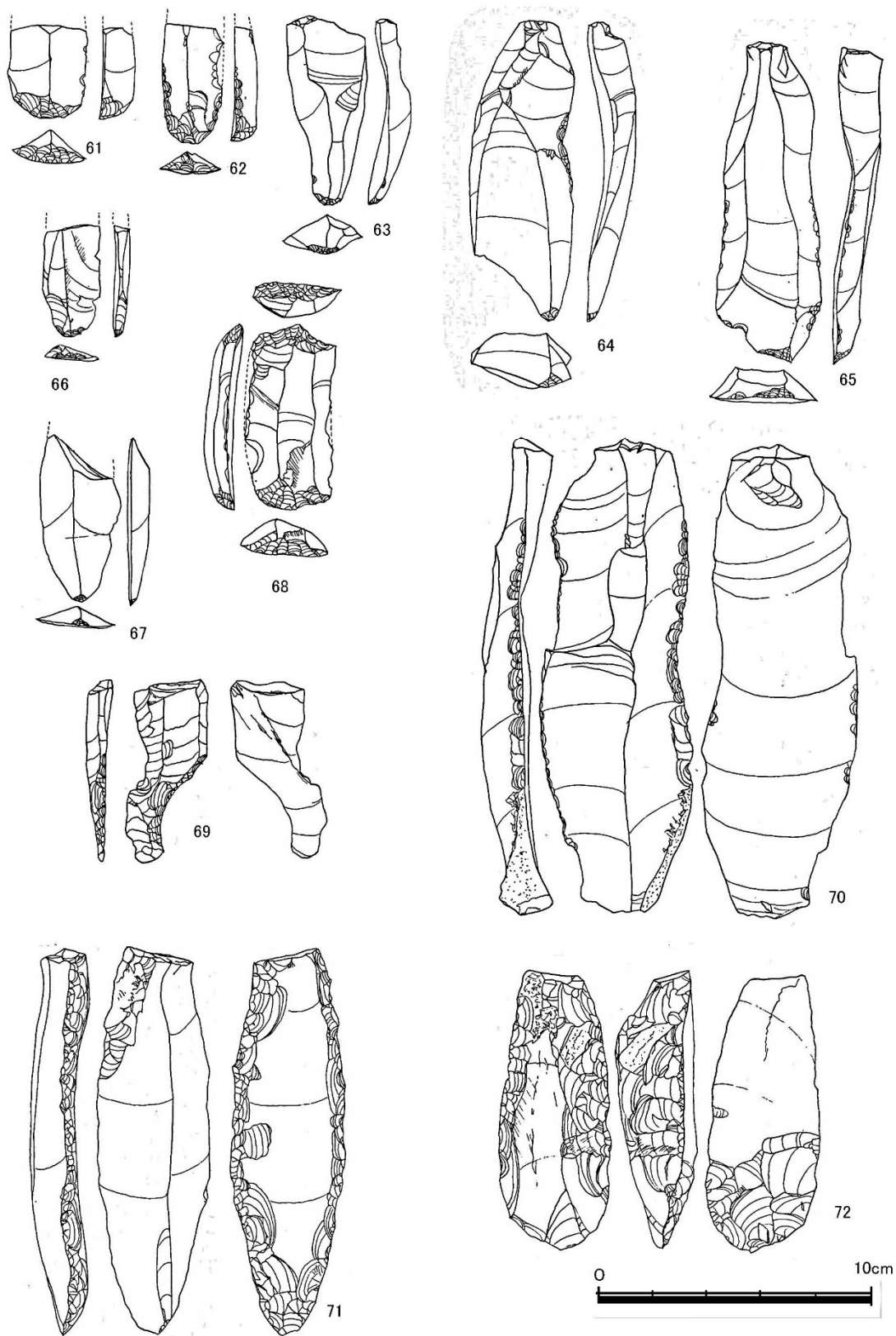


南野遺跡出土石器 (2)





南野遺跡出土石器 (4)



南野遺跡出土石器 (5)

(4) 長井市指定の旧石器

「石核 蔵京遺跡出土」として1点の石刃核が指定されている。この石刃核は高さ13.7cm、幅5.9cmで上下両設で調整打面である。上設打面から7枚の、下設打面から2枚の石刃が剥離された痕跡がある。



蔵京遺跡の石刃核

(5) 小国町指定の縄文時代草創期の石器

「東山紺野遺跡出土の黒曜石製石器」として小国町東山紺野遺跡から出土した尖頭器と片刃石斧が指定されている。

黒曜石製石器が出土した東山紺野遺跡はJR小国駅の東方700m、岩井沢地内にある後期旧石器時代終末期の遺跡である。近隣には「東山型ナイフ」の標式遺跡となった東山遺跡のほか、岩井沢遺跡や平林遺跡等、石器文化の異なる後期旧石器時代遺跡が点在している。

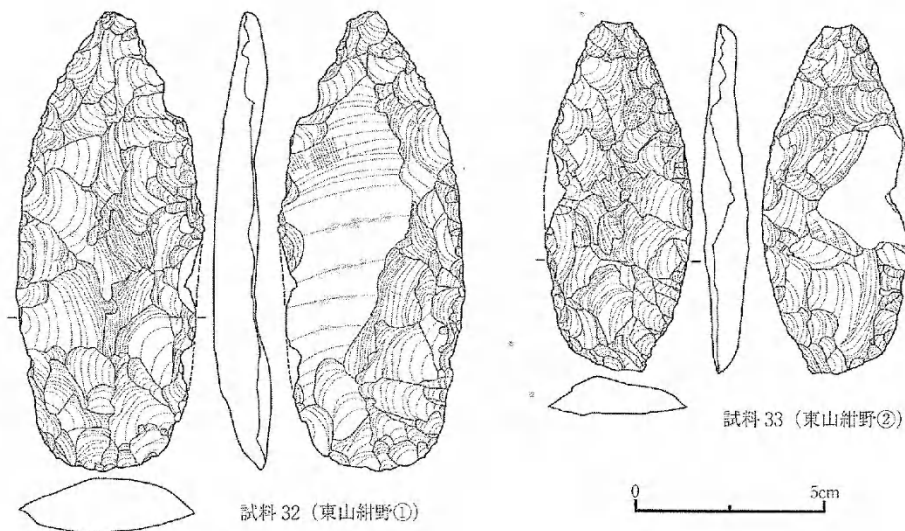
これらの遺跡の内、岩井沢遺跡と東山紺野遺跡は、地元小国高等学校による研究活動が発見の端緒となった遺跡として知られている。東山紺野遺跡発見の経緯は以下の通りである。1972年6月、小国高等学校長の高山法彦は、紺野嘉美から自宅脇の畑から出土したとされる石器を見せてもらった。その石器は、尖頭器、片刃石斧、石刃、石刃尖頭器、そして搔器等のいわゆる後期旧石器時代終末期の特徴を持った石器群で、石材は主に見られる珪質頁岩の他、本町では珍しい黒曜石も含まれていた。この事に注目した高山校長は直ちに山形大学教育学部加藤稔講師に連絡した。

これが契機となり本遺跡はその年の11月、山形大学大教育学部加藤ゼミと小国高等学校郷土史研究部によって調査が行われ、4点の黒曜石剥片が採取された。加藤氏等は、石器出土地点が東山遺跡の近くにある紺野氏の耕作地であったことから、遺跡名を「東山紺野遺

跡」と命名した。

本遺跡出土の黒曜石製石器は、長さ9cmの尖頭器と、同12.2cmの片刃石斧の2点で、現在では縄文時代草創期「御子柴・長者久保石器文化」の仲間に入る石器（1.5～1.6万年前）とされている。一方、黒曜石はこれまで本町の山城や河川などから発見された例が無く、その上外見だけでは原産地を判断する事が出来ないため、長らく本石器の石材原産地は不明のままであった。

こうした中、平成30年5月渋谷孝雄等は、蛍光エックス線分析法による県内遺跡出土黒曜石製石器の原産地同定結果を発表した。その中には東山紺野遺跡出土の黒曜石も含まれており、2点とも青森県深浦産であることが判明した。



3 新庄市内の旧石器時代遺跡と出土遺物

(1) 新庄の旧石器時代遺跡の調査の歩み

東北地方の旧石器研究は、1958年の加藤 稔による鶴岡市越中山A遺跡の発掘調査で本格的に始まった（加藤1958）。その4年後の1962年から新庄盆地でも旧石器時代遺跡の発掘調査がはじまった（加藤1964）。

新庄盆地では1962年に県下で一斉に行われた埋蔵文化財緊急調査（分布調査）を契機として多くの旧石器時代の遺跡が発見され、その年から65年にかけて横前、山屋、新堤の各遺跡で加藤稔を担当者として発掘調査が行われた（加藤1963、柏倉他1969、宇野・佐藤1973他）。また、1975年からは長澤正機を発掘担当者とする新庄市教育委員会によって、新庄市南野遺跡、乱馬堂、山屋A遺跡の発掘調査が行われ（長澤1977、79）、1981年には乱馬堂遺跡においてほ場整備事業に伴う緊急発掘調査が行われ、多数の石器が出土したことは上述した（長澤1982）。

1976年には新庄福田工業団地の造成事業に伴って、1981年には国営の新庄農業水利事業の実施計画に伴い新庄市及び鮭川村の一部の踏査を県教委が実施し合わせて20ヶ所の旧石器時代遺跡を登録した（佐藤編1977、渋谷編1982）。1987年からは、先の踏査で発見された新庄市上ミ野A遺跡の発掘調査が東北大学によって行われ、以後、東北大学では新庄盆地に於て断続的に同遺跡や真室川町丸森1遺跡、舟形町高倉山遺跡、新庄市白山

E・B遺跡で発掘調査が行われてきた。

(2) 新庄の後期旧石器時代後半期のナイフ形石器をもつ石器群

1962年、小国盆地東縁の段丘を踏査した佐々木洋治が東山遺跡において大形の石刃を素材とするナイフ形石器を採集し、小林達雄はこの石器を「東山型ナイフ形石器」と命名した(小林1962)。同じ頃、新庄盆地東縁部で横前遺跡が発掘調査され、翌年にかけて新堤遺跡でも発掘調査が行われた。これらの遺跡からは小国東山遺跡で採集された石器群と類似する石器群が発掘された(加藤1964、宇野・佐藤1973他)。

その後、新庄盆地で発掘された二側縁加工のナイフ形石器や鋸歯縁石器、ノッチで組成される上ミ野A遺跡南西ブロック出土石器群を除き、石器群の大半は東山型ナイフ形石器をもつものであり(長澤1977、79、82、斎藤・渋谷2007、佐野他2010、11、12)、最初に発見された小国町より新庄盆地の方が濃密に分布し、これらの石器群の中心地あったことを窺わせている。ただ、調査を行った年代が古いものが多く、それらの前後関係を決定づける年代資料が不足していたが、近年の東北大学調査遺跡では多くの放射性炭素による年代測定が実施され、ある程度の目途が立ってきた(阿子島・鹿又・熊谷2019)。

このように多くが東山型ナイフ形石器をもつ石器群であったが、新庄盆地の西縁で2013年から2016年に調査が行われた白山E・B遺跡で杉久保型ナイフ形石器を持つ石器群が発掘された。新庄市新堤遺跡から採集されたナイフ形石器にも1点の杉久保型ナイフ形石器があり、その検出を目的とした発掘調査では残念ながら杉久保型ナイフ形石器は出土しなかった。

それから50年以上が経過した2013年、東北大学による新庄市白山E遺跡の発掘調査で杉久保型ナイフ形石器や神山型彫刻刀形石器で組成される石器群を新庄盆地で初めて検出された。それに続く白山B遺跡でもそれが出土し、県内では最も多くの旧石器時代遺跡が所在する地域となった。

(3) 遺跡内での石器製作の有無

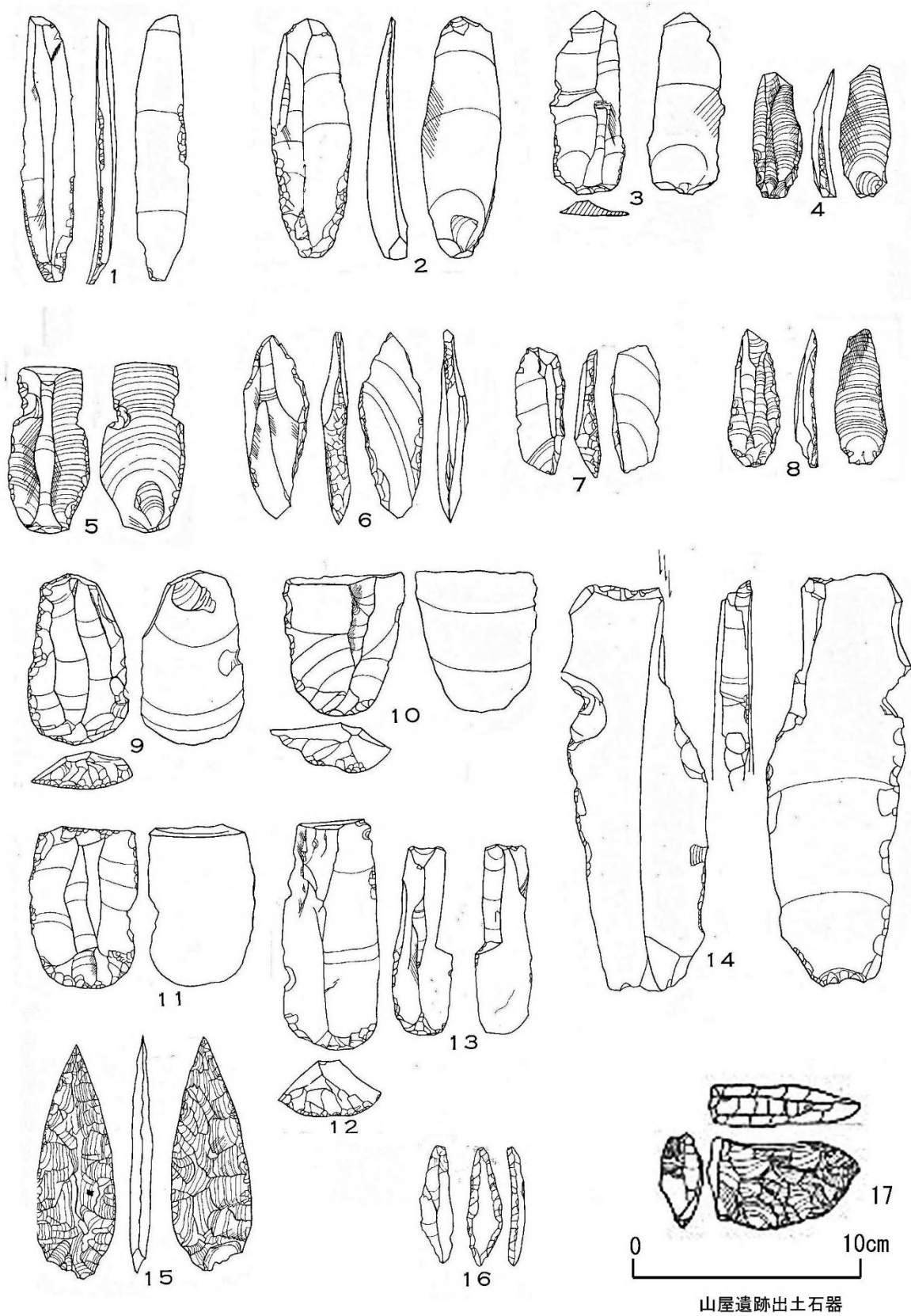
山形県内には良質の頁岩を産する岩脈があり、遺跡内での石器製作を示す接合資料も少なくない。長澤正機は1971年に接合資料を解析し(長澤1971)、渋谷孝雄は小国町岩井沢遺跡で出土した良好な接合資料(加藤他1974)と金谷原遺跡の資料を分析し、調整技術の有無や工程の差に着目した(渋谷1976)。その後も、越中山A‘遺跡の石刃の接合資料(加藤1973他)、同K遺跡の瀬戸内技法の接合資料が紹介され(加藤、鈴木1976)、具体的な資料に基づく製作技術が論じられる。そして、頁岩の原産地遺跡であるお仲間林遺跡や段丘を挟む上野A遺跡では大量の石刃や石器素材を製作した事実が明らかになる(阿部他1991、1995、黒坂他1995、米倉他2002)。しかし、原産地遺跡は山形県内でもある一定の地域に限られ、そこを離れば、消費地遺跡としての一般的なあり方を示す遺跡が多いことも判明しつつある。新庄盆地や庄内北部の遺跡では石材産地から離れているため、わずかな素材製作が認められる遺跡(横前、山屋A、乱馬堂)はあるが、石器素材の製作を大量に行う遺跡はなく、新庄盆地には逆に、素材の製作を全くあるいはほとんど行わない遺跡(南野、高倉山、新堤)や、刃部の再加工も行わない遺跡(太郎水野2)も認められる。

なお、珪質頁岩の石材論を展開し続けている秦昭繁の一連の論考は山形県内での旧石器時代遺跡の有り様を紐解くためにも重要な示唆を与えている(秦1995他)。

(4) 新庄市内の旧石器時代遺跡の概要と出土石器

山屋遺跡

山屋遺跡は新庄市大字金沢字山屋に所在する。戸前川の右岸にある山屋の集落の北西の



丘陵上に立地し、標高は135 mを測る。1962年に加藤稔が発掘調査担当となって新庄市教育委員会によって行われた(加藤1964)。遺跡の層序は以下のとおり。

I : 褐色土(17~22cm)

Ⅱ：黄褐色粘土(62cm)

Ⅲ：赤色粘土(18cm以上)

2×14mのトレンチからは若干の剥片が出土しただけで、採集されている石器群と同じものの出土はなかった。採集された石器にはナイフ形石器(1～8)、搔器(9～12)彫刻刀形石器(13・14)のほか尖頭器(15)と細石刃核(17)があるが、これらが、共伴するかどうかはわからない。ナイフ形石器の石材には黒曜石も用いられている。

新堤遺跡

新庄市金沢山3146-1914に所在する。奥羽山脈から流れる戸前川と新田川に挟まれた洪積段丘上に立地する。発掘調査は1964年と65年に行われた(宇野・佐藤1973、柏倉他1969)。

遺跡の層序は

I：黒褐色腐植土層(15～20cm)

Ⅱ：茶褐色土層(40cm内外)

Ⅲ：褐色土層(30cm内外)

Ⅳ：赤色の粘土化した礫層

V：石英粗面岩の腐れる礫層

石器はⅡ層の上面から5～30cmの間で出土した。調査のきっかけは39の杉久保型ナイフ形石器が採集されており、横前や乱馬堂遺跡等で出土していた東山型ナイフ形石器をもつ石器群との比較資料を得るためであったが、発掘調査で出土した石器は、またもや東山型ナイフ形石器をもつ石器群であった。

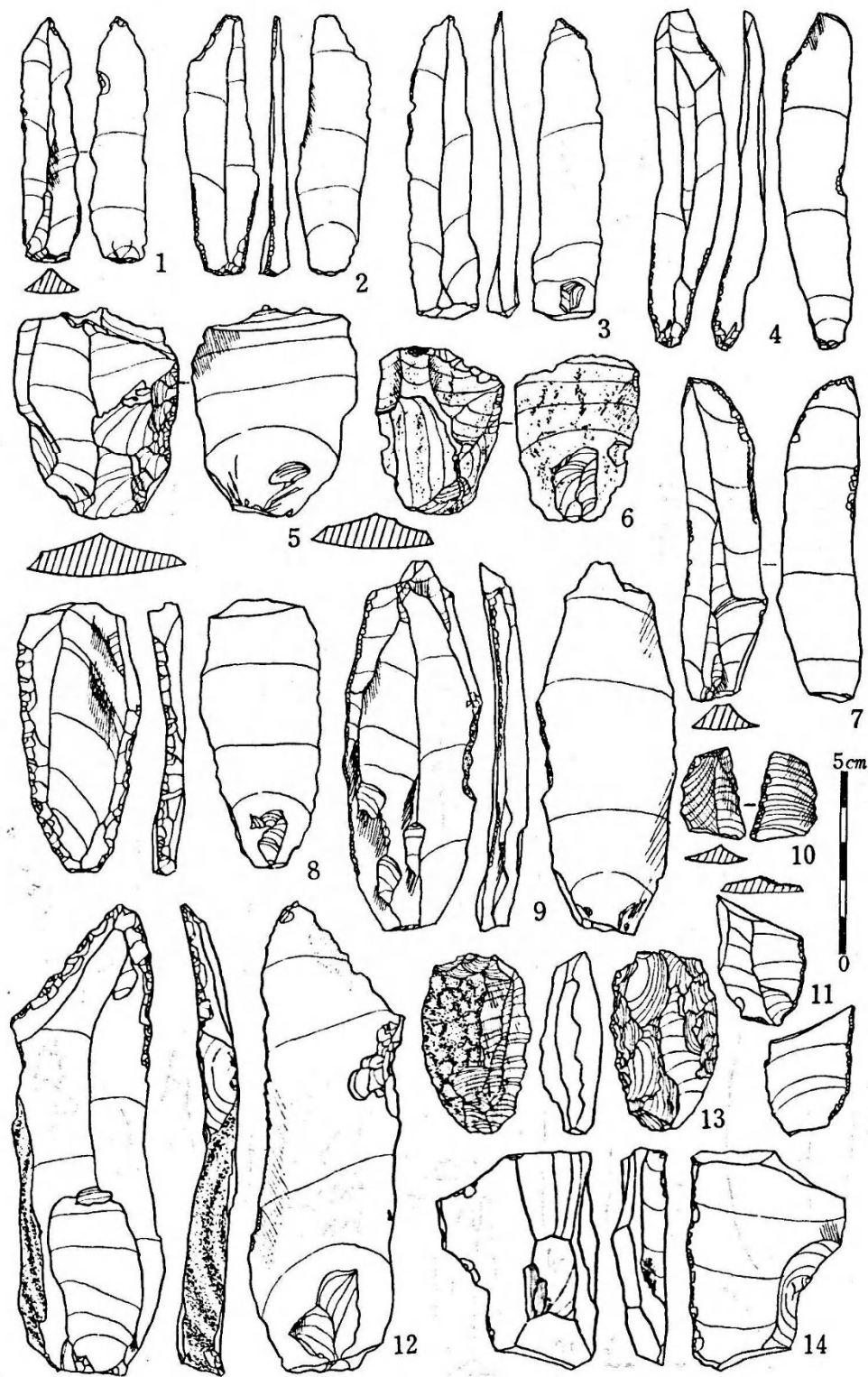
ナイフ形石器(1～13)には先端部を意図的に尖らせようとするものはないが、先端部の両側縁に加工が認められるものもある(7、12)。

彫刻刀形石器は石刃の基部側を折り取ってそこから彫刻刀面を作出したもの(14)が1点出土したのみである。

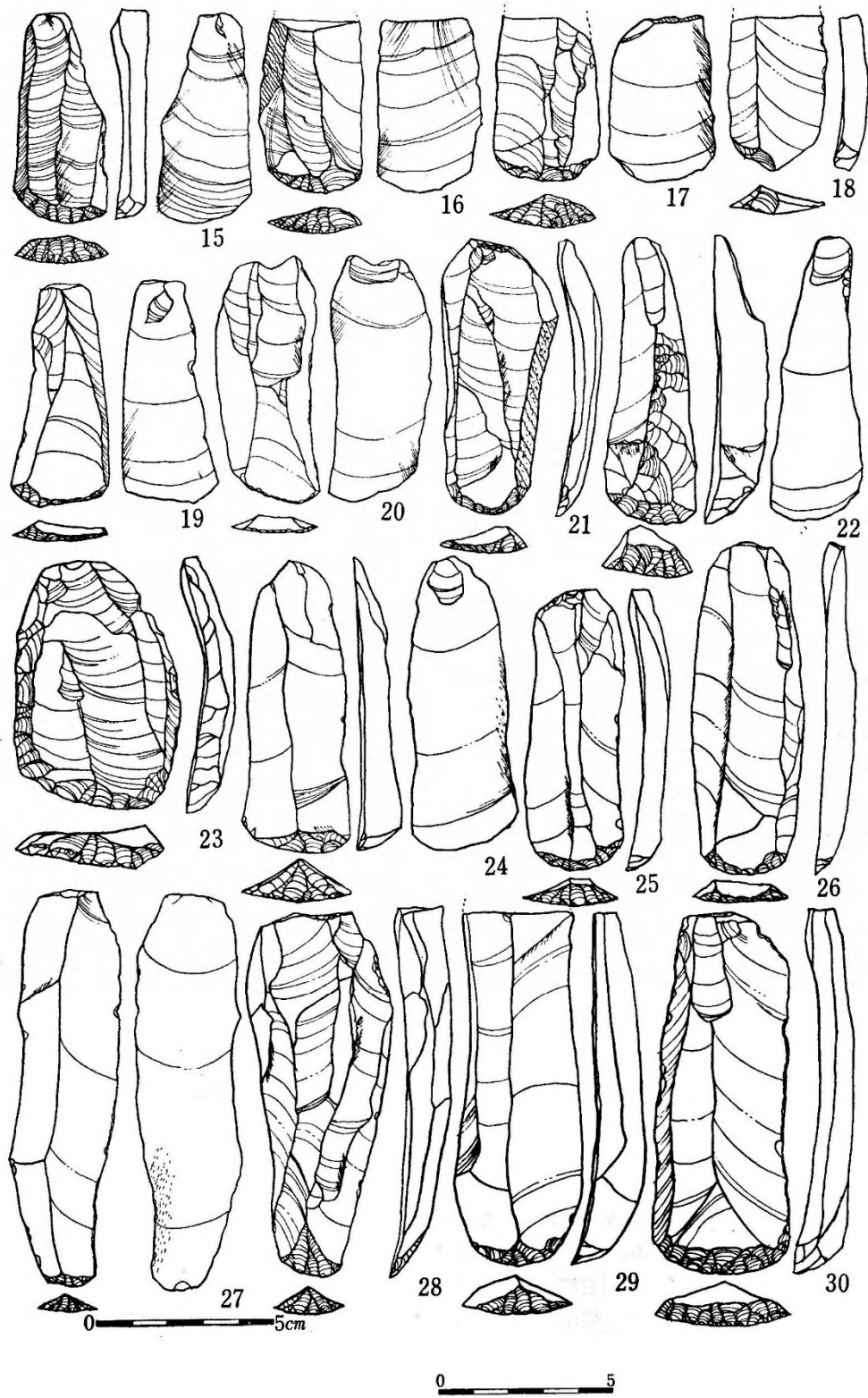
搔器は小形石刃を素材とする一群(15～18)、小形石刃の薄い末端部に刃部があるもの(19・20)、短冊形の石刃を素材とし直線的な刃部をもつもの(25・26、30)、大形石刃を素材とし弧状の刃部をもつもの(24、27～29)などがある。搔器の石材に玉髓は1点もなく、黒曜石と頁岩が用いられている。

石刃が29点出土しているが、遺跡内で石刃を剥離した痕跡はない。新堤遺跡の特徴は石器や石刃の占める割合が高いこと、石材に黒曜石も使われていることなどである(宇野・佐藤1975、会田1993)。

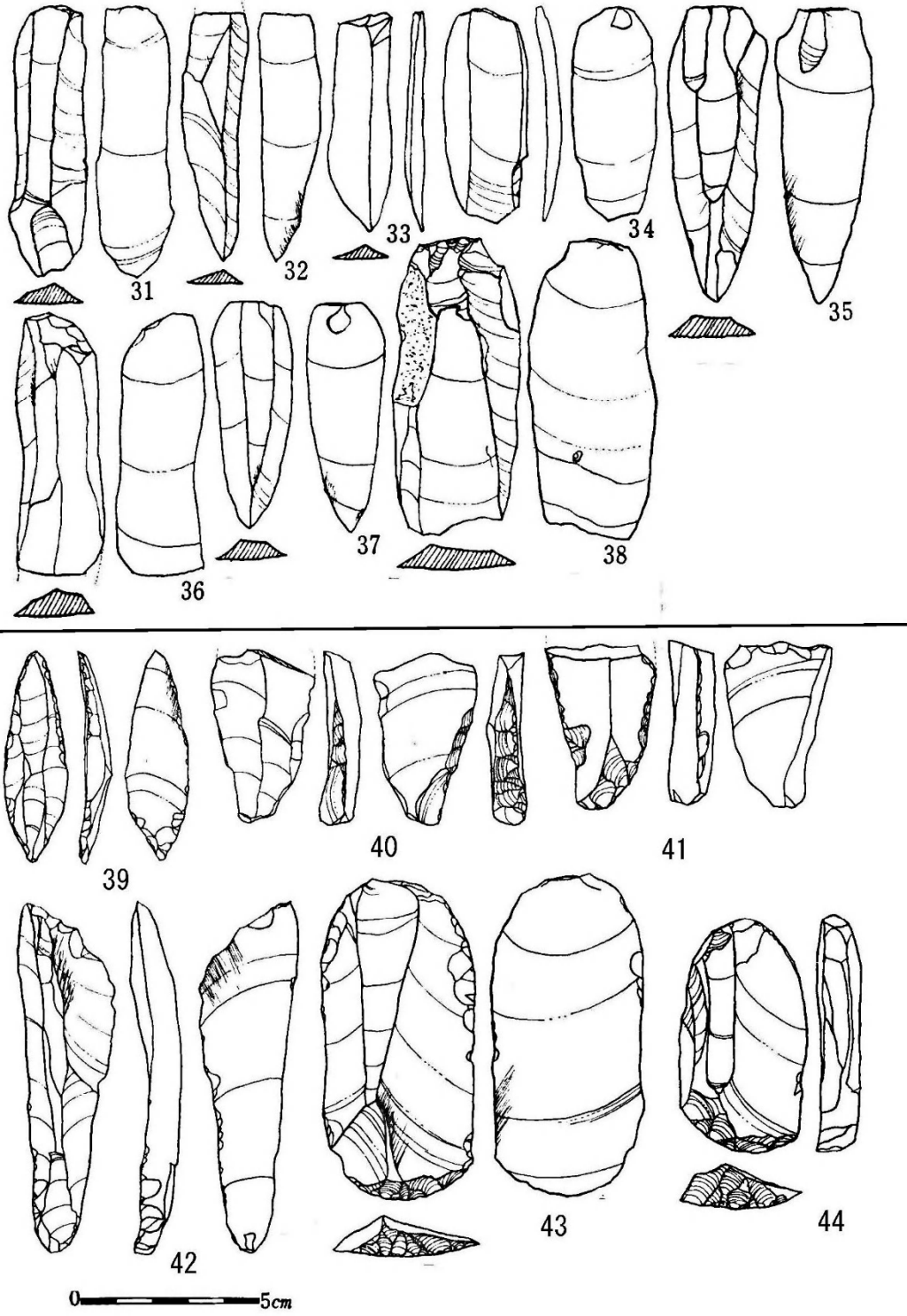
新堤遺跡の黒曜石製石器について産地同定を行っているが、そのすべてが青森県の深浦産であった(渋谷・佐々木2018)。東北地方の分析例をみると東山型ナイフを持つ石器群に伴う黒曜石は圧倒的に深浦産が多いということも判明しつつある。



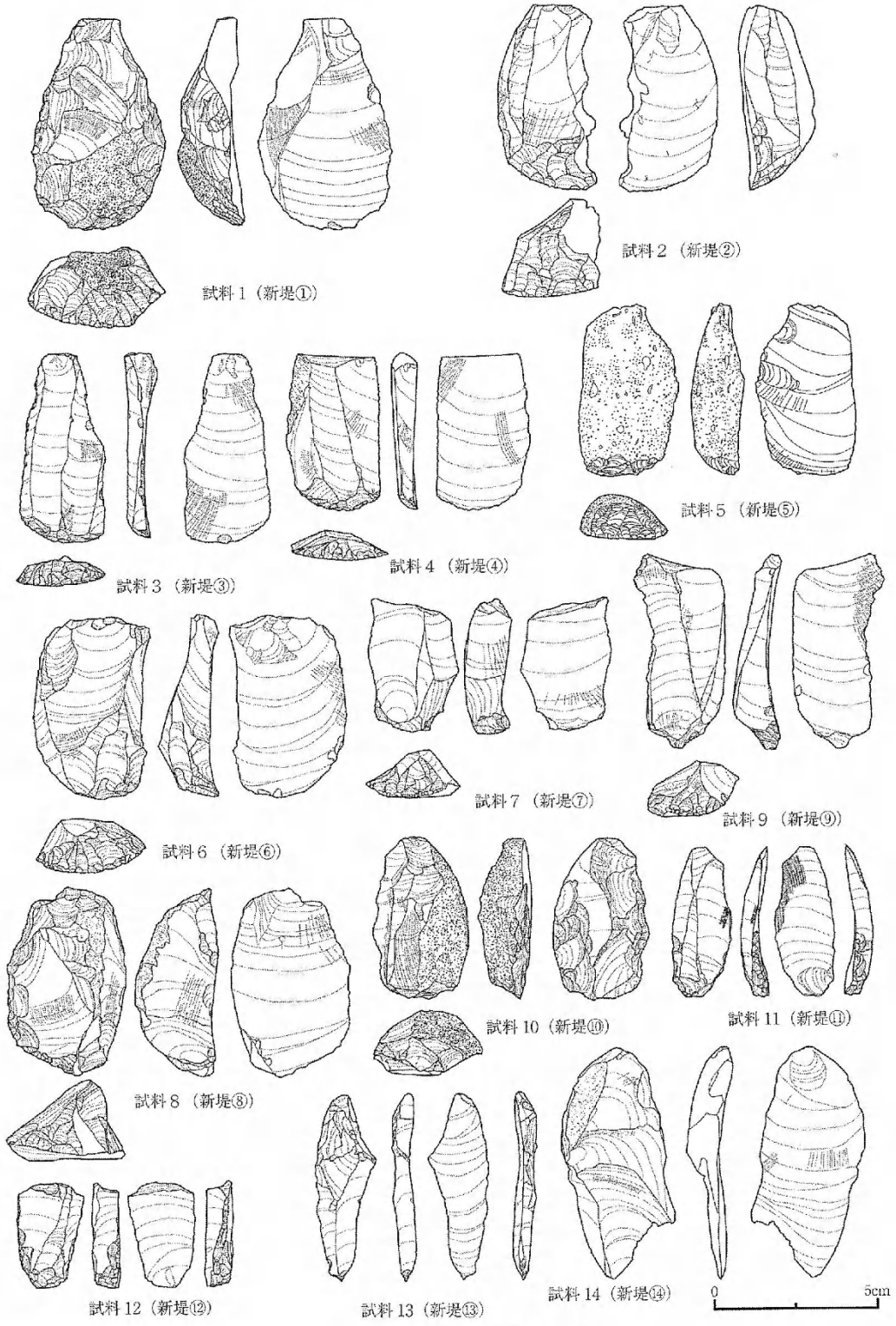
新堤遺跡出土石器



新堤遺跡出土石器 (2)



新堤遺跡出土石器 (3)、採集石器 (下段)



産地同定分析石器実測図 1

山屋A遺跡

山屋A遺跡は新庄市金沢字山屋3044に所在する。1962年に旧石器の採集が確認された山屋遺跡との関係は定かではない。山屋A遺跡は山屋集落と大福田集落の中間の戸前川の北側台地上に立地する。長沢正機が調査担当となって1977・78年に3次にわたって新庄市教育委員会によって発掘調査が行われ(長澤1980)。1962年の調査ではそれまで明確でなかった石器包含層を捉えた。長澤はこの調査地を山屋A遺跡とした。遺跡の層序は

I：黒褐色耕作土

II：漸移層

III：黄褐色粘土(以下赤褐色粘土と続く)

石器はI～III層から出土するが、本来はIII層に包含されていたと考えられている。3ヶ年にわたる調査で324㎡が調査され、667点の石器が出土した。これらの石器は新庄盆地の他の遺跡群とほぼ同じ器種構成となる。

ナイフ形石器は基部と先端両側に加工を施した尖頭器状のものが目立つ(1～3)。

彫刻刀形石器は通常型(18・19)と小坂型(20・21)がある。

縦形搔器は21点と出土数が最も多い。側縁から基部にかけて加工が認められるものも少なくない(13～16・17)。

石刃生産が行われた形跡はないが、剥片と碎片の出土量が多く、遺跡内で不定形の剥片生産が行われていたようである。

上ミ野A遺跡

新庄市大字飛田1098番地40に所在する。1981年の国営新庄農業水利事業関連の遺跡詳細分布調査で旧石器時代の遺跡であることが確認された(渋谷編1982)。

その後、新庄盆地の踏査を続けた山田晃弘等東北大学考古学研究室のメンバーによって1984・85年に二側縁加工のナイフ形石器が採集され、翌1986年の山田による試掘調査を経て、1987年に会田容弘による第1次発掘調査、1991年にも会田による第2次調査が行われ、2004年に報告書が刊行された(東北大学大学院文学研究科考古学研究室2004)。

この間、2000年8月に東北大学考古学研究室による第3次発掘調査が行われ(柳田・須藤・阿子島2000)、その報告書も2012年に刊行されている(傳田他2012)。

遺跡は新庄盆地の西、升形川によって形成された海拔88mの中位段丘上に立地している。遺跡の層序は

1 a：黒褐色シルトの耕作土(15～20cm)

1 b：暗褐色シルトの耕作土(3～5cm)

1 c：暗褐色シルトの耕作土(5cm)

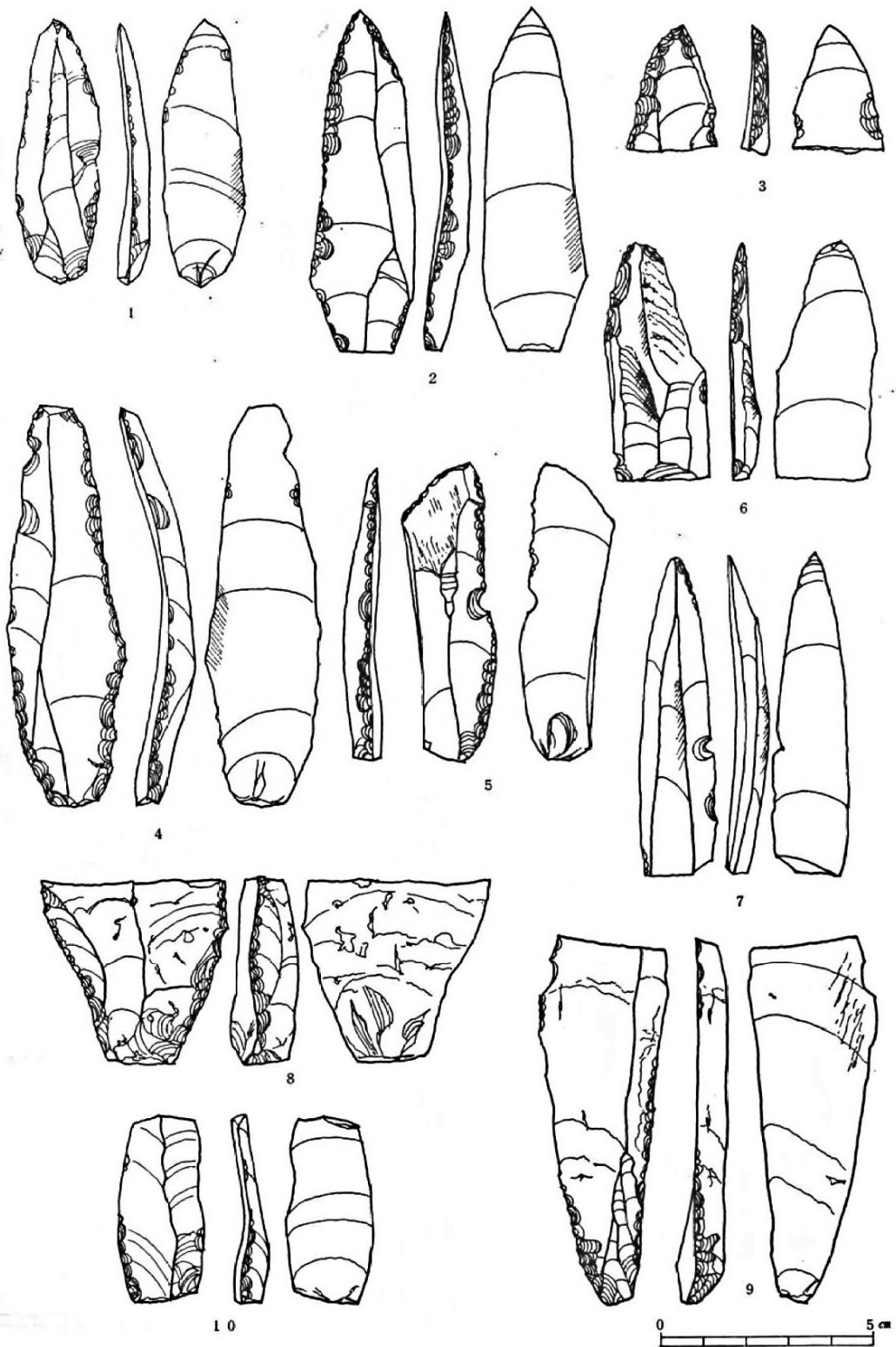
2：暗褐色シルトの漸移層(5～8cm)

3 a：赤みがかった褐色粘土質シルト(15～20cm)

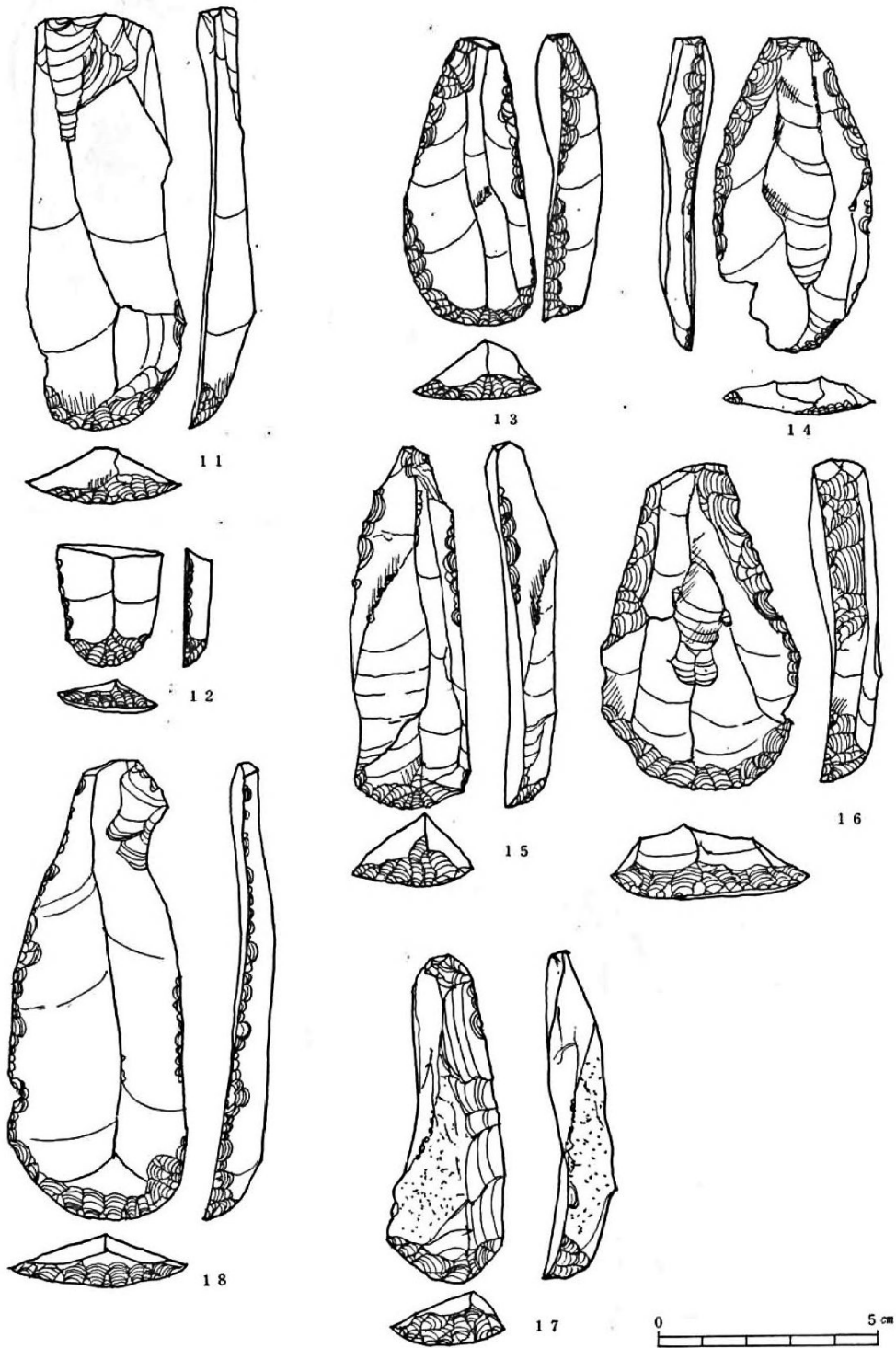
3 b：黄色みの強い褐色粘土質シルト(15～20cm)

4層：褐色粘土質シルト(20cm)

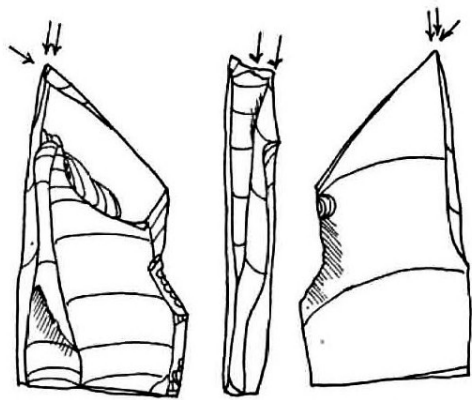
と続いている。石器の包含層は3 a層で、その上部には十和田八戸テフラ(To-H)が、3 b層中部には始良丹沢火山灰(AT)が、4層の基底部では北原火山灰(KtA)が検出されている。したがって、石器群はATよりは新しく、十和田八戸よりは古いと層位学的に確定している。



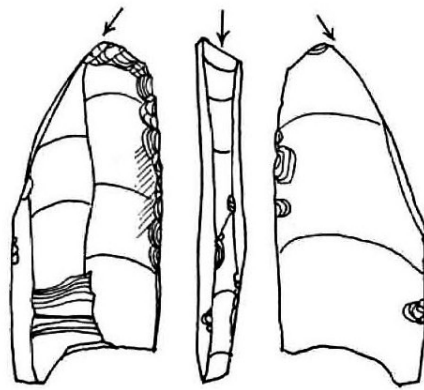
山屋A遺跡出土石器 (1)



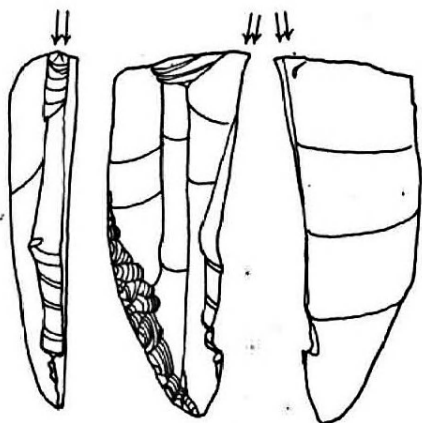
山屋A遺跡出土石器 (2)



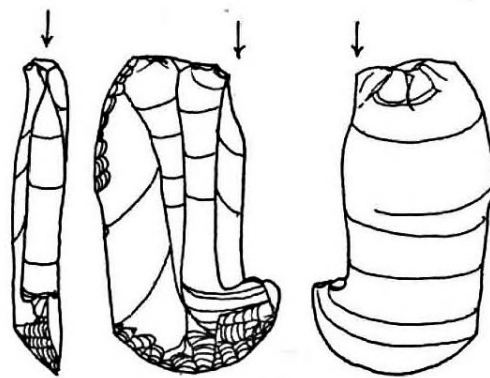
18



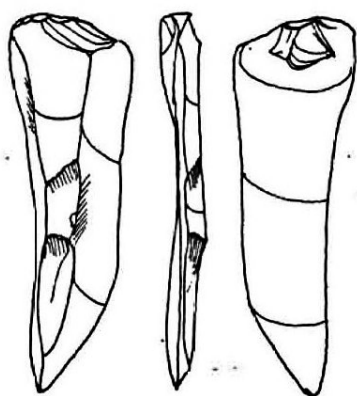
19



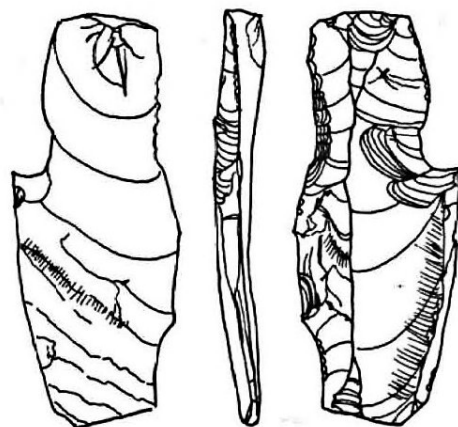
20



21



22



23



山屋A遺跡出土石器 (3)

1991年までの1・2次調査の面積は合わせて90㎡、2000年の3次調査の調査面積は75㎡である。石器は1・2次調査で2,959点が出土し、2000年の調査区からは5,122点が出土した。なお、このうちの4,079点は篩で回収した資料である。2000年の調査区からは同じ層位から1・2次と同じ仲間の石器群（A群）が600点、東山型ナイフ形石器をはじめとする石刃石器群（B群）が4,522点出土した。A群とB群は慎重に検討された結果、異なる人類活動によるものである可能性が高いとされた。

石器石材は頁岩を主とし、少数の黒曜石、玉髄、凝灰岩が利用されている。91年までの調査区からはナイフ形石器26点、スクレイパー4点、搔器32点、サイド・スクレイパー1点、彫刻刀形石器4点、鋸歯縁石器4点、ノッチ11点などが出土している。1991年までの調査で出土した二側縁加工が施されたナイフ形石器（1～17）は肩を作り出した特殊な形となり、このようなナイフ形石器は新潟県樽口遺跡（立木1996）や長野県東浦遺跡（土屋・谷2000）、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡（堤編1997）等での出土が確認されているが、九州を含む西日本との関連が窺える資料である。また、2000年に出土した石刃製の基部加工ナイフ形石器（29）は新庄盆地に多い東山型ナイフ形石器である。彫刻刀形石器は折れ面を打面として彫刻刀面を作出したもの（18）と素材の末端部に背面側から剥離を施して打面を作り、そこから彫刻刀面を作出したもの（30）がある。いずれも、彫刻刀削片（スポール）が接合する。搔器の多くは素材剥片の形状を大きく変更しない程度に側縁部に二次加工が施されるものはあるにせよ刃部以外に目立った加工のないものが多数を占める（20・21）が、24は基部の両側縁からノッチ状の加工を施して舌状の基部を作り出している特殊な形態となり、この加工技術は九州地方に分布する剥片尖頭器に類似する。

石器の使用痕分析で搔器は刃部を用いた皮なめし作業、ナイフ形石器と鋸歯縁石器は鹿角・骨・木などの硬い被加工物を削った痕跡が確認され、二次加工のない小型剥片にも使用痕が確認された。

礫群と石器の分布、それに使用痕分析から上ミ野A遺跡は形成過程と作業内容の異なる二カ所の場合から構成されていることが明らかにされた。一つは調査区中央部で、ここでは礫群の構築、火の使用、石器の製作・使用・廃棄に至る複雑な活動痕跡が確認され、調査区北東隅では礫群集中域での搔器を使用した皮なめし作業が行われていたことが判明した。

白山E遺跡

白山E遺跡は新庄市大字飛田上ミ上野564-3に位置する。升形川が形成した新庄盆地西縁の標高93～94mの河岸段丘上に立地する。1981年の国営新庄農業水利事業関連の遺跡詳細分布調査で旧石器時代の遺跡であることが確認された（渋谷編1982）。東北大学考古学研究室では2013年、新たな発掘調査地を求めて分布調査を実施し、白山D遺跡と白山E遺跡に挟まれた畑地で、多くの遺物が表面採集できることを確認した。その中には杉久保型ナイフ形石器や彫刻刀形石器、細身の石刃などを含み、杉久保石器群と予想されたことから、発掘調査が行われることとなった。

発掘調査は2013年14年に行われた。遺跡の層正は以下のとおり。

第1a層 表土層。耕作土。第1b層 黒褐色シルト。第2層 漸移層。暗褐色シルト質粘土。第3層 褐色シルト質粘土。物包含層。遺物包含層。第4層 黄褐色シルト質粘土。遺物包含層。第5層 黄褐色シルト質粘土。第6層 明黄褐色シルト質粘土。第7層 黄褐色シルト質粘土。

第3・4層から石器が出土した。

出土した石器にはナイフ形石器（1～17）、彫刻刀形石器（18～35）、彫刻刀スポール

(36~42)、石刃(33~55・57)点、稜付き石刃(57・58)、二次加工ある石刃、二次加工ある剥片、剥片、碎片、礫がある。

トウールの割合は数比で29.3%、重量比で53%になり、石刃関連資料を加えると数比で47.6%、重量比で82.9%に達する。石核はなく、剥片・碎片など遺跡での石器製作活動の石器が少ない。

ナイフ形石器は破損したものが多い。残存部位と製作技術の特徴でⅠ類：完形・準完形。先端加工を施すもの(2)と施さないもの(1)がある。Ⅱ類：基部のみが残存するもの(第3~12)。Ⅲ類：先端のみが残存するもの(13~16)。Ⅳ類：剥片素材の二側縁加工ナイフ形石器(17)に分類される。

彫刻刀形石器(18~35)は素材の一端に側縁と平行あるいは斜行する彫刻刀面(ファシット)が確認できるもので基本的には腹面先端部を連続的に加工することで器軸に対して斜行した打面を作り、その頂点を打撃することで素材縁辺(左肩)と平行する彫刻刀面を作出する、いわゆる「神山型彫刻刀形石器」に該当する。

彫刻刀スポールは16点ある(36~42)。

白山E遺跡では4層の炭化物3点から18,400±60BP、18,420±70BP、18,180±50BPの放射性炭素年代が得られ、18,000年代前半の値となっている。

旧石器包含層から得られた炭化物の放射性炭素年代は18180±50(未更正)であった。

白山B遺跡

白山B遺跡は、新庄市大字飛田上ミ上野625-6に所在し、升形川が形成した新庄盆地西縁の標高94~95mの河岸段丘上に立地する。発見は1981年に遡るが、発掘調査は東北大学により2015・16年に行われた。基本層序は以下のとおり。

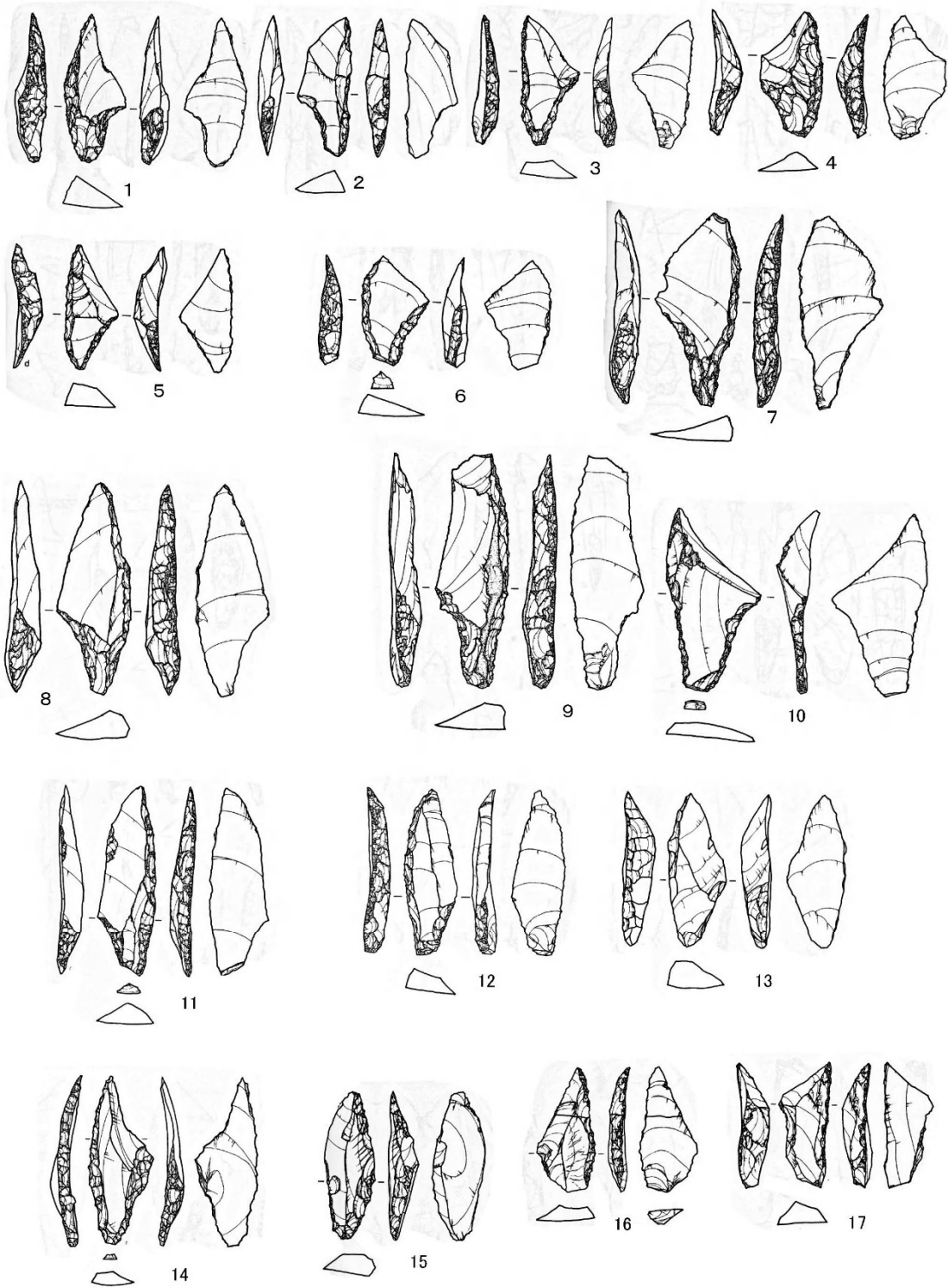
第1a層 黒褐色シルト。第1b層 黄褐色シルト質粘土。第1c-1層 黒褐色シルト。第1c-2層 黒色シルト。第2層 黄褐色シルト質粘土。第3a層 黄褐色粘土。主要な遺物包含層。

第3b層 黄褐色粘土。第4層 赤褐色粘土。第5層 黄褐色シルト質粘土。第6層 明褐色粘土。第7層 明褐色粘土。基盤礫層 黄褐色粘土質シルト。

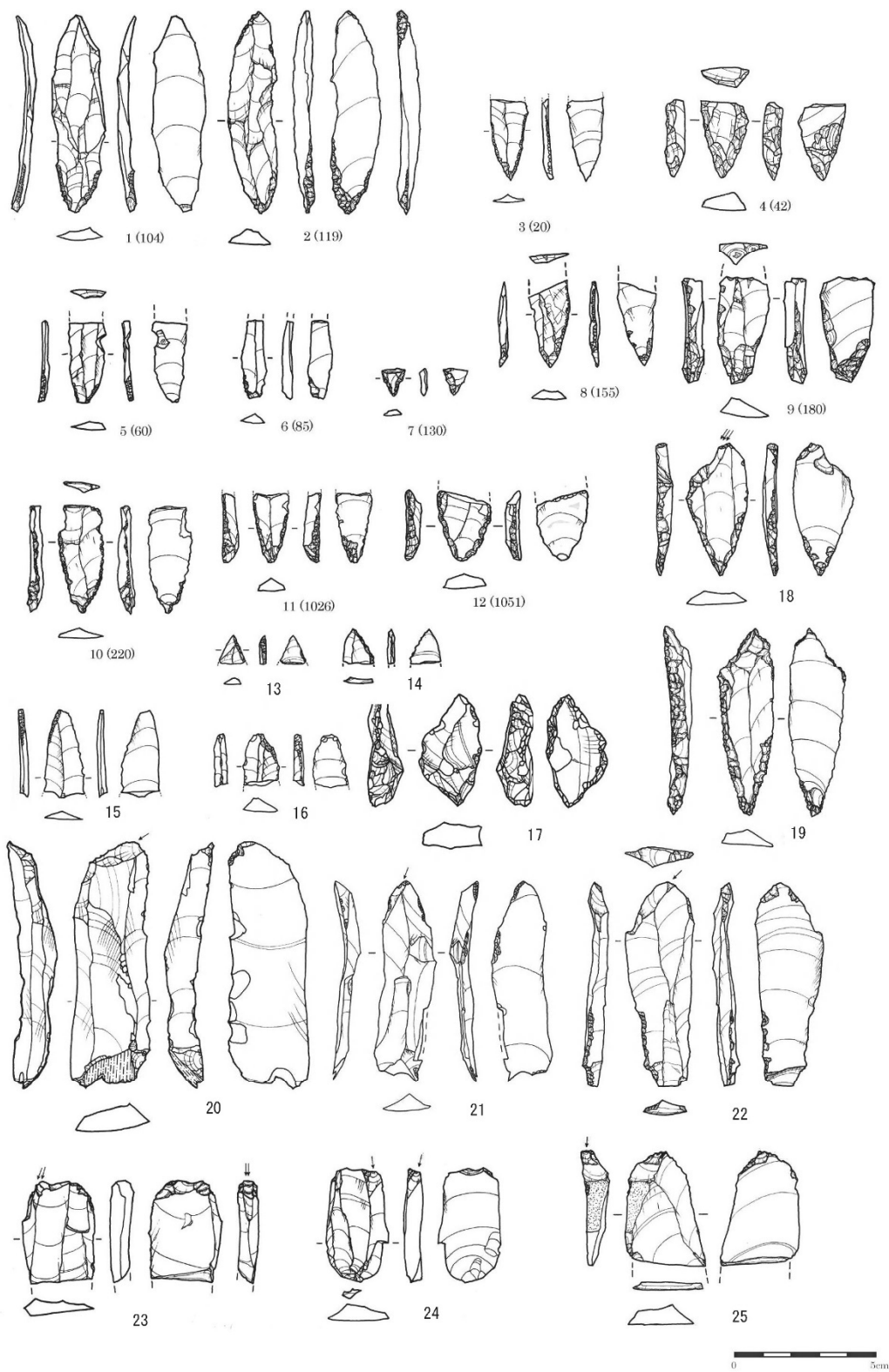
包含層は第3a層である。

出土した石器はナイフ形石器1点、彫刻刀形石器4点、彫刻刀スポール6点、搔器1点、石核2点、二次加工ある石刃3点、二次加工ある剥片4点、接合するものも含め石刃・稜付き石刃が40点となっている。ナイフ形石器は杉久保型に類似するが、彫刻刀に神山型はない。また、縦型搔器が伴い、石刃も白山E遺跡に比較すると幅が広いものが多い。類杉久保石器群といえることができる。

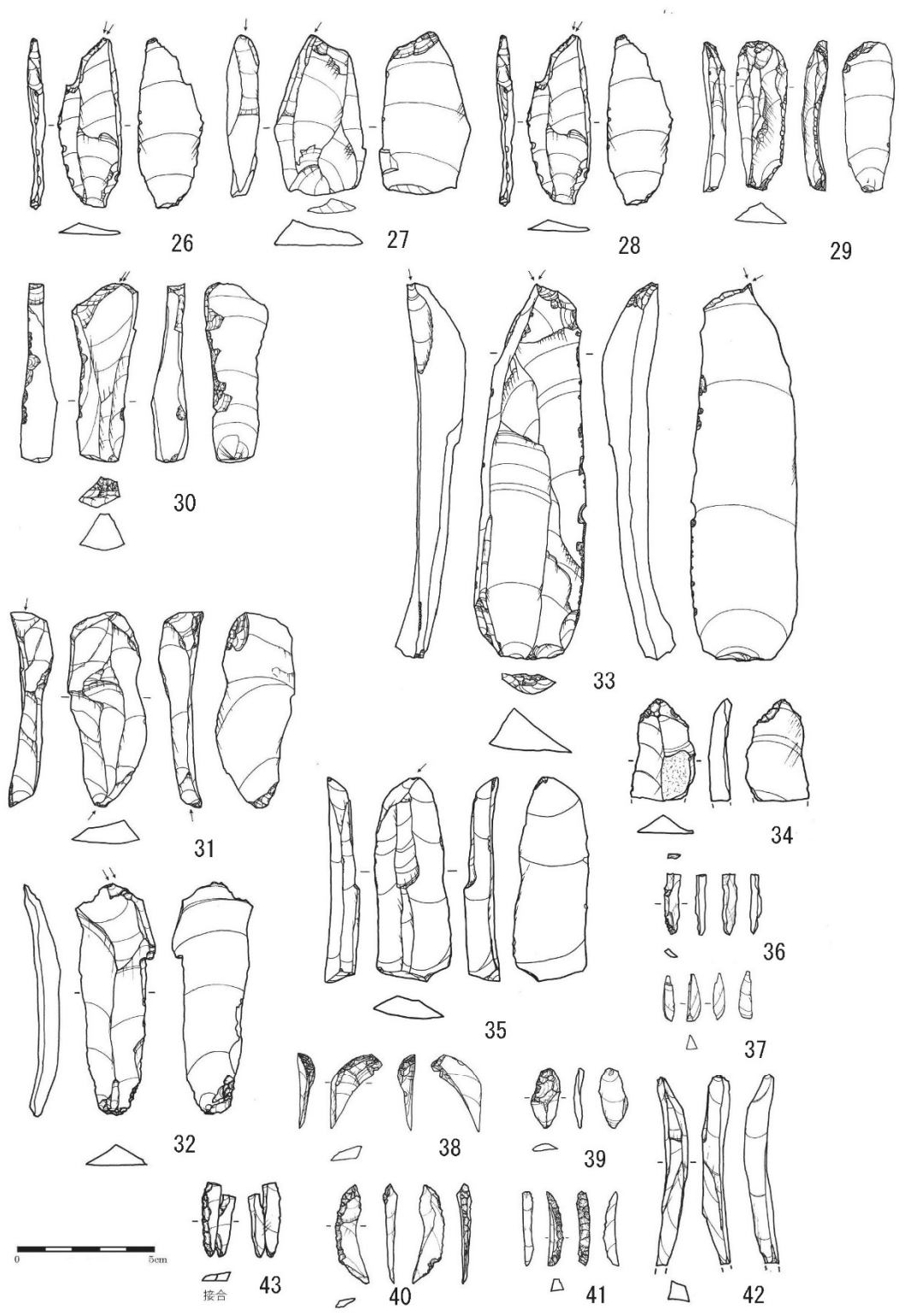
白山B遺跡では、3b層の炭化物から19,440±70BP(IAAA-151262)の年代値が得られた。



上三野A遺跡出土石器(1)



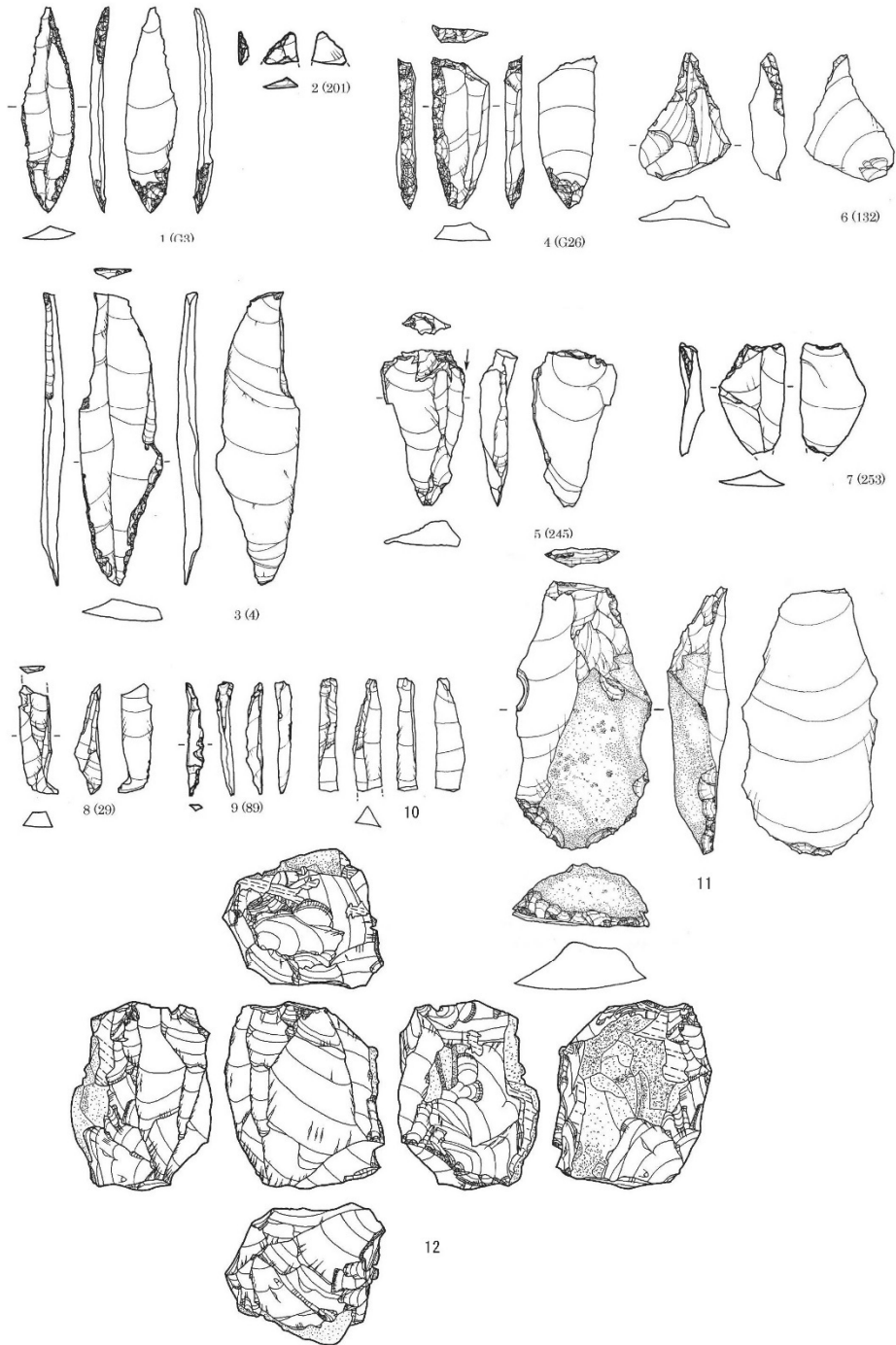
白山 E 遺跡出土石器(1)



白山 E 遺跡出土石器(2)



白山 E 遺跡出土石器(3)



白山B遺跡出土石器

4 山形県内の旧石器の文化財指定候補

山形県内の旧石器時代の遺跡調査は東北各県に先んじて進められてきた。加藤稔の功績が大きいことは言うまでもない。

1980年代から東北各県で開発事業に伴う緊急調査が始まると東北各県でも資料の集積が進んできている。これらのうち、新庄市は進んで文化財として指定してきた。

さて、今後、どのような出土品が指定候補となるであろうか。目につく資料を以下に記したい。

(1) 後期旧石器時代前半期

小国町岩井沢遺跡の出土資料

1972年の加藤稔の発掘調査。前半期の石刃製作を示す接合資料は好資料である。

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館収蔵資料。

(2) 後期旧石器時代後半期

① 西川町お仲間林遺跡出土資料

1993年の財団法人山形県埋蔵文化財センターの発掘調査。

後半期の東山型ナイフ形石器を持つ石器群の石刃製作を示す接合資料は好資料である。

山形県収蔵資料。

② 大石田町角二山遺跡の出土資料

1970年の加藤稔の発掘調査。

東北地方で初めて確認された細石刃石器群。北海道との交流を示す好資料。

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館収蔵資料。

(3) 後期旧石器時代終末期～縄文時代草創期

① 鶴岡市越中山A遺跡の出土資料。

1958年の加藤稔の発掘調査。

東北地方で初めて調査された旧石器時代の出土資料。学史上の価値。

致道博物館収蔵資料。

③ 酒田市八森遺跡の出土資料

1996年から2002年八幡町教委の発掘調査。

長者久保・神小柴石器群と呼ばれる土器出現期の尖頭器や局部磨製石斧が出土。

酒田市収蔵資料。

④ 高島町日向洞窟及び日向洞窟西地区の出土資料。

1955年からの高島町教委主体、柏倉亮吉担当の調査資料及び1987～89年の高島町教委の発掘調査の出土品。

縄文時代草創期の研究の学史的な資料。大量の草創期の石器群。

高島町教委収蔵資料。